

2025年度 地域経営学部 地域協働型教育研究 報告書



はじめに

本報告書は、地域経営学部が2025年度に開講した学年別の演習科目の学修成果を取りまとめたものです。2016年4月に本学が開学後、地域協働型教育研究に関する報告書を毎年度刊行しています。ちなみに開学から4年間は、大学全体としての報告書でしたが、情報学部が発足した2020年度からは、地域経営学部としての報告書を刊行しています。

本報告書は学年ごとの学修成果を示すために3つのパートに分けて編集されています。1年生を対象とする地域経営演習Ⅰ・Ⅱのパートでは、開講した6つのクラスそれぞれに1頁を割り当てています。クラスを担当した教員による活動内容と学修のねらいに関する説明に続いて、受講学生が学びから得たこと、気づいたことを語っています。地域経営研究Ⅰ・Ⅱ（2年生ゼミ・2024年度カリキュラム）、および、地域経営研究Ⅰ・Ⅱ（3年生ゼミ・2020年度カリキュラム）のパートでは、担当教員が学修のねらいについて説明し、両学年の受講学生が学びから得たこと、気づいたことを語っています。4年生を対象とする卒業研究Ⅰ・Ⅱのパートでは、本年の卒業生たちが提出した全ての卒業研究を取り上げ、その研究テーマの一覧を示しています。

地域経営学部では上記以外にもいくつかの演習系科目を設置しています。そのなかでも「地域キャリア実習」と「病院実習」は、地域社会で活動する企業、自治体、医療機関等の皆様のご協力のもとで、学生が実務を経験するという意味で、地域協働型教育研究の重要な構成要素となっています。本年度の報告書においては、「地域キャリア実習」と「病院実習」についても、その代表的な活動事例を取り上げ、概要を紹介しています。

本報告書のタイトルは、昨年度より「地域協働型教育研究」報告書となりました。本学では、全ての学生が卒業研究を行い、卒業することになっています。入学後の各学年における学修成果は、最終的に卒業研究に集約されるため、本報告書のタイトルにも「研究」という文言を明記しました。あらためて述べるまでもありませんが、「地域協働型教育」は、本学が開学以来、基本理念として掲げてきた教育目標です。2026年度から始まる新たな教育体制とカリキュラム内容の編成を見据え、より一層研究に重点を置くことを表現したものです。

本学の演習科目では、学生が教員とともに地域を訪問し、住民の方々と交流・協働して地域の課題を発見し、解決の方策についても検討することが重視されています。本報告書をお読みいただければ、演習科目においては地域社会の現場に入り込んだフィールドワークや、課題解決に向けた実践志向の学修が占める比重が高くなっていることをご理解いただけたと思います。

地域経営学部長・井上直樹



目次

はじめに

地域経営演習Ⅰ・Ⅱ（1年生）

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ（2年生）

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ（3年生）

卒業研究Ⅰ・Ⅱ（4年生） テーマ一覧

地域キャリア実習

病院実習

地域経営演習 I・II



現場に学ぶ地域経営

— 三和町における実践的フィールドワークを通じた地域理解と課題解決 —

教員名 亀井省吾・張 明軍



活動内容・学修のねらい

地域経営演習Ⅰ・Ⅱでは、福知山市三和町を主なフィールドとして、地域の企業、農業、観光、教育など多様な現場を訪問し、地域が直面する課題とその対応の実態を実践的に学ぶことを目的としました。学生は、企業経営者や地域住民から直接話を聞き、地域資源の活用方法や人を中心とした経営・運営の工夫を理解するとともに、農家民宿や教育現場の見学を通じて、農村の新

たな可能性や地域で人を支える仕組みについて考察しました。さらに、グループワークを通じて課題を分析し、実現可能性を踏まえた提案を行うことで、地域を多面的に捉える視点、他者と協働して考える力、現実的に物事を構想する力の養成を目指しました。

学びから得たこと・身につけたこと

様々な場所に行かせてもらったことで、それぞれの土地や事業を知ることができ、その緻密さや計画性を知ることができてよかったです。また、そこから計画をたてて行動することが増えたため、身につけることができたと思います。発表資料を添削してもらうことで、客観的な視点を貰うことの重要性を知ることができました。また、資料を作っていくなかで、意見をちゃんと喋っていけるようになったことは良かったと思います。

松永 侑

実際に三和に訪れ、地域の問題とその解決方法をグループで考えました。しかし、解決方法を考えていく中で新たな問題が次々として出てきて、それらを全て実現することは難しく、妥協しなければならぬ場面も多くあったため、その点が難しかったです。解決策は考えるだけであれば多く出てきますが、実現可能性を考えなければ意味が無いということを学びました。後学期の演習を通じて、現実的に物事を考える力が身についたと感じています。

内藤唯月

1年間の学びを通して、知識を得るだけでなく、実際に行動し実践することの重要性に気がきました。(株)Season様の訪問では、挑戦し続ける姿勢や失敗を恐れない行動力が農業の可能性を広げていると感じました。また三和学園では、体験を積み重ね自ら考え発信する学びが人を成長させると実感しました。これらの経験から、頭の中で考える、教室で講義を聴くだけでなく、まず行動する姿勢を今後も大切にしたいです。

山本きあら

1年間三和町に通い、農村部が直面する現状と、そこで暮らす人々の工夫を肌で感じることができました。特に農家民宿「あぶら屋」では、伝統的な農村でありながら海外からの旅行者が自然に集まる国際的な雰囲気や驚き、地域外の人を温かく迎え入れる農村の新しいあり方を学びました。また小中一貫校の見学を通じ、地域で子どもたちの学びを支える重要性について新たな視点をいただきました。今後の学習に活かしていきたいです。

仲埜澄人

福知山市 夜久野地域での学び

教員名 神谷達夫・中尾誠二



活動内容・学修のねらい

前学期は、第1回(5/8)福知山市夜久野支所・夜久野みらいまちづくり協議会・図書館等の機能が集約された『夜久野ふれあいプラザ』等、第2回(5/22)古民家活用『宮カフェ』、第3回(5/31)大峠地区等の登山愛好者組織『居母山クラブ』、第4回(6/19)農家民宿&お試し住宅『米ya』、第5回(7/3)西垣自治会『ムベ圃場』で各回フィールドワークを行いました。

後学期は、第1回(10/12)『天満神社』秋祭り体験、第2回(12/6)

『夜久野学園』中2生との交流は全員で行い、それ以外は学生の選んだテーマに応じた複数班それぞれが現地を訪問し、実践的な演習を進めました。規定授業時間外にも『米ya』宿泊(2026/1/16・1/24)等で多くの学生が地元の人達と交流を深めました。

これらを通して夜久野地域の現状と課題、様々な取組について学びました。

学びから得たこと・身につけたこと

地域経営演習を通して、地域づくりは施策だけでなく、人の思いや関係性、対話の積み重ねによって支えられていることを学びました。フィールドワークでは、主体的に行動する住民や多世代の関わりが地域の活力や継続性につながることを実感しました。また、関係人口を増やすことが地域の活力につながることを体験し、「住むか住まないか」ではなく「関わり続ける」という関係の持ち方の重要性を学びました。

越後七海

地域の人と直接関わることで、講義や資料だけでは得られない学びを多く得ることができました。特に、地域の課題に対する考え方は住民一人ひとりで異なり、外部からの一面的な視点では捉えきれないことを実感しました。また、話を聞く際には情報収集を目的とするだけでなく、相手の立場や背景を意識して耳を傾ける姿勢の重要性を学びました。これらの経験を通して、地域に関わる際の視点や態度が身についたと感じています。

品川菜々美

地域経営演習を通して、地域のことを机上の情報だけでなく、現場で人と関わりながら理解する姿勢を身につけました。とても高齢化が進んでいるとは思えないほど元気に活動している方が多く、その前向きさに触れて地域への印象が大きく変わりました。フィールドワークを重ねる中で、自分なりに考えを深めたり、少しずつ主体的に動けるようになったりと、地域を見る視野が広がったことを実感しています。

浜谷春花

田植え・稲刈り、秋祭りなど多くのフィールドワークに参加し、地域の人と「会話」する大切さを学びました。数字では分からない、現地に行ったからこそわかる事が沢山あり、その中で地元で活かせるような案はないかと、自分事として考えられるようになり、また、まちづくり協議会の方など自分より目上の人と話す機会が多かったので、大人との話し方・接し方を身につけることができました。

美馬はるか

大江町での学びを実践に変える 地域共創プロジェクト

教員名 大門大朗・福島真治



活動内容

前学期では、座学として、①福知山市の地域行政や大江町についての講義、②実践手法の学習などを行いました。また、バスによる大江町の視察を2回、ワークショップを1回行い、観光資源を切り口として大江町の地域特性を理解することを心がけました。後学期では、テーマごとに4班に分かれ、グループワークやイベント実施などの活動をし、最終回で関係者を招聘し、各班より活動内容についてのプレゼンテーションを行いました。

学修のねらい

前学期は、地域の方からの講演やフィールドワークを通じて、大江について広く知ることを目指しました。後学期では、「大江に貢献できる取り組み」をテーマに、地域住民の協力を得ながら学生主体で活動内容を検討・決定しました。実際の活動においては、2年次以後の地域活動に活かせる学修とするため、地域の方と連携を取りながら協働して進め、地域住民に成果を還元できるよう努めました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は地域経営演習を通してイベントを実施することの難しさを実感しました。私の班は、大江町の鬼という資源を利用し大江に興味を持ってもらうことを目的として紙粘土を用いた鬼瓦作りと神経衰弱作りをしました。そして、活動をする中で地域の方から意見をいただいたり、鬼にまつわるイベントに参加させていただくなど貴重な経験を行うことができました。この1年間で得た経験や知識を今後の取り組みにも活用していきたいです。

待田結衣

大江駅前の飲食店「鬼和味」様の協力を得て、クッキーの開発・販売を行いました。販売に向けて地域の方々と会話を重ねる中で交流が生まれ、地域の魅力を実感することができました。特急列車停車の30分間に合わせて観光客の方に直接販売した際は、商品のPR方法の課題もありましたが、交流を通して地域の魅力を伝えることができました。今後も地域や人とのつながりを大切に、積極的に関わることで学びを深めていきたいです。

岡本真希

私たちの班は、大雲記念館と和紙に着目し、子どもたちが楽しみながら学べる体験型イベントを実施しました。館内を巡って大雲記念館や和紙についての問題を解く活動や、和紙の水切り体験を通して、見る・触れることの大切さを実感しました。準備や運営の過程では、広報や進行管理に課題がありましたが、実践を通して地域資源の魅力を伝える方法を学びました。この演習で得た学びを、今後の地域に関わる活動に活かしていきます。

福山遥香

大江の地域住民の「由良川＝水害」という負のイメージを変えようという目標で、様々な体験から自ら由良川の魅力を感じたことから、水族館の展示のサポートや、水上レースイベントを実施しました。アンケート結果からも多くの人に由良川の魅力を伝え、少しのきっかけで地域住民のイメージが変わり得るということを学びました。また、学生が関わることで、地域に新たな視点や活力をもたらす可能性があると感じました。

浅井岳大

地域との協働実践を通して プロジェクトマネジメントを学ぶ

教員名 小山元孝・谷口知弘



活動内容・学修のねらい

公民館との協働によるプロジェクトの実践から、持続可能な地域社会の実現に貢献できる「実践的能力」を育成するために必要な2つの基礎的な力を身につけました。1つは「地域社会に学び貢献するために必要な姿勢や態度」、もう1つは「チームで問題解決のプロジェクトを実践するプロジェクトマネジメントの基礎知識」です。

地域協働実践では、桃映地域公民館及び大正地区公民館との協働により2つのプロジェクトを実践しました。

●桃映地域公民館PJは、公民館と協働で多世代交流の促進を試みました。大学生と子どもや地域住民の交流の場づくりとして紙芝居の読み聞かせや人生相談をテーマに交流カフェを実施しました。

●大正地区公民館PJは、学生目線での新たな提案をして欲しい、また今後4年間かけて関わって欲しいという地域の要望を受け、祭に新しさを生み出すことを試みるため、スタンプラリーや子ども遊び場の提供、ステージ企画を実施しました。

学びから得たこと・身につけたこと

本演習では、課題解決への姿勢と実践力を学びました。親子スポーツデーでの読み聞かせでは、紙芝居を媒介とした大学生と子ども達の相互交流が生まれました。子ども達が飽きないように回を重ねる中で、本の選定や読み方、聞き方などを工夫しました。また、コミセフェスタでの企画は、公民館の課題を一から考えました。企画自体も子どもからお年寄りまで幅広い世代に参加していただけたことで成功に繋がったと感じています。

小出 桜 (桃映地域公民館PJ)

はじめのうちは、問題を細分化しすぎたり、一人で理詰めで解決しようとしてしまうことがありました。演習の回数を重ねるにつれ、自分の考えをはっきり持つことと同じくらい、話し合いで生まれる考えも大切だと思うようになりました。話してみた方が進む議題もあることや、動いてみて初めて分かったり、考えたりできることがあることも学びました。人と人が関わる難しさや、話すことから生まれる可能性の大きさを実感しました。

北條友希代(桃映地域公民館PJ)

公民館まつりを通して、イベントを行うための企画、準備、進行、実施と様々な手順を踏んで確実に開催するための方法を実感できました。全世代の人が関わられるように試行錯誤するのが大変でしたが、この土台が今後も重要になってくると感じました。参加した小学生たちが想像以上に行動力があり、色々な人と交流もしてよかったと感じました。普段関わることの無い世代の人とたくさん交流出来るいい機会になってよかったです。

山岸莉心 (大正地区公民館PJ)

自分たちが考えた案を実行に移す経験がこれまでは少なかったもので、今回はとてもいい経験になりました。まつりには小さい子どもから高齢の方まで、いろいろな話を耳にすることができました。当日は雨のため、自分たちが考えていたゲームができなくなるどころでしたが、用意したものを中でも使えるようにして実行することができました。地域の方と密接に関わることができる貴重な機会だったため、この経験を大切にしたいと思います。

西岡唯人 (大正地区公民館PJ)

廃校活用・地域づくり組織から考える 地域PBL (Project Based Learning)

教員名 木村昭興・倉田良樹・杉岡秀紀



活動内容・学修のねらい

1-Eクラスは、地域のパートナー団体へのフィールドワークを通じて、北近畿、とりわけ福知山市が抱える現状や課題を学ぶとともに、調査における基礎的なスキルを修得することを目的に、3グループに分かれ活動を展開しました。川合チームは、三和町にある旧川合小学校にて、フィールドワークや調査を行ったほか、「川合元気まつり」に実行委員会から参加し、ニュースポーツやアンケート調査に取り組みました。庵我チームは、庵

我まちづくり協議会、由良川藍同好会の協力も得ながら、アンケート調査やそば開発に取り組んだほか、地元の地域団体が開催するイベントに協力しました。中六人部チームは「教育旅行」をキーワードにヒアリング調査を行ったほか、中六人部地域づくり協議会のライトアップに協力しました。

その他、福知山ロータリークラブ所属の経営者との対話を行い、視野や見聞を広める活動も行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

本演習を通して、私は会話の大切さを学びました。様々な方から直接お話を伺ったことで、自分たちでは気づかなかった需要や思いを知ることができました。また、中六人部のイベントに参加した際に、地域の方と会話をすることでお互いが笑顔になったり小さな一言で会話が膨らんだりしました。更に、地域活性化につながるアイデアを考える際、既存の物を活用しつつ新しい視点から物事を考えるということを活かしたいと思いました。

市山さくら

私はこの1年間で多くの地域の方々に関わることができました。大学生として地域にできることを考え、実践してきました。地域資源である藍とそばを組み合わせ、藍入りそばの試作に取り組みました。また藍植えやそばの刈り取りなど様々な活動に参加する中で、地域の方々の温かさや地域の魅力を感じました。演習で得た学びを今後の学習に活かすとともに、本演習を通して築いた庵我地域との関わりを今後も大切にしていきたいです。

久保陽詩

この演習を通して、人のつながりの大切さを学びました。実際に川合元気まつりやビザ窯作製などの活動を通して地域の人とのつながりができ、もっとたくさんの人に川合地域を知ってほしいと思うようになりました。また、地域の人だけでなく共に活動したメンバーとの親交も深まり、楽しく学びの多い時間を過ごせたと思います。今後も演習で関わった地域の方々との交流を続け、人とのつながりを大切にした活動をしていこうと思いました。

齋藤健司

この1年間実際に足を運ぶことで、地域でしか得られない学びを多く実感しました。現場の声を聞く中で、技術だけでなく、人との関わりによって文化が守られ、その中に伝統文化の新たな可能性があることも感じました。また、自分たちで考えた取り組みが形となり、地域の方に喜んで頂けたことは大きな達成感と楽しさにつながりました。調査で得た気づきを今後は地元の課題解決や地域づくりに活かしていきたいと考えています。

濱 綾乃

保健医療福祉の視座から地域課題を知り 情報学の視点から解決方法を考える

教員名 岡本悦司・川島典子・星 雅文



活動内容・学修のねらい

医療福祉経営学科の学生で構成されるFクラスでは、保健医療福祉の視座から人口減少に苦慮する北近畿の地域課題を事前・事後学習とフィールドワークで把握し、その解決方法を情報学の視点から考える講義を行いました。北近畿の課題を知るために、福知山市のみならず宮津市・舞鶴市にもフィールドワークの範囲を広げています。宮津市では、特別養護老人ホームと障がい者施設および保育園が同居している複合施設「マ・ルート」に赴き、地域に関か

れた福祉の姿を学びました。舞鶴市では、引揚記念館や引揚桟橋を訪れて援護局によるシベリア抑留者の引揚の歴史を学びました。典型的な中山間地域である福知山市三和町では、障がい者福祉施設「福知山学園」でICTを駆使した見守りなど要介護者・介護者双方の負担軽減を図る先進技術を学びました。当クラスは医療福祉専門教育への接続として、事前・事後学習とフィールドワークで経験を学びに昇華させています。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度の演習活動では、地域経営学部の他のどのゼミよりも多くのフィールドワークや、映画鑑賞などを通して地域協働や医療福祉について1年生ながらに深い学びができました。宮津の「マ・ルート」や「福知山学園」など実際に現地に行って体感しないとわからないことはたくさんありました。医療とはなんなのか、何をもちて福祉なのかという質問を投げかけられ、それについて自分なりに考え向き合っていく機会を頂けてとても有意義な演習活動でした。

神永龍之介

私は、地域経営演習Ⅰ・Ⅱにおける学びを経て北近畿の魅力について知りました。特に一番印象に残っていることは、『ラーゲリより愛を込めて』の映画を見て舞鶴引揚記念館を訪れたフィールドワークです。シベリア抑留についてとても考えさせられたとともに舞鶴が引き揚げ港の1つだったことを初めて知りました。地域経営演習Ⅰ・Ⅱを通して入学当初はほとんど知らなかった北近畿の魅力を知る機会になりました。

呉谷海音

「マ・ルート」や「福知山学園」でのフィールドワークを通じて、施設内の支援にとどまらず、地域住民とのつながりを重視した取り組みが行われていることを理解しました。就労の活動として地域の人々に向けて製品を販売する取り組みがあり、利用者が働くことを通じて地域社会の一員として関わっていることを学びました。このことから、地域経営では人と人との関係性を大切にするという、視点到に気づきました。

柴田美優

地域経営演習Ⅰ・Ⅱを通して、私は北近畿地域への理解を大きく深めることができました。東北から越してきた私にとって北近畿は馴染みのない地域でしたが、学外研修で実際に各地を訪れ、資料や数字だけでは分からない、地域の雰囲気や課題を肌で感じることができました。また、医療や介護の問題を自分事として捉えられるようになり、地域が抱える課題について主体的に考える姿勢を身につけることができました。

新妻夕美歌

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ (2年生)



京都府北部の自治体への現地訪問を通し、地域の多様性や戦争と平和について考える

教員名 大谷 杏



学修のねらい

2年生のゼミでは、各市町に焦点を当て「事前調査」、「現地調査」、教室での「報告」の3段階で京都府北部の多様性や地域課題について学びました。また、フランク・エバンス『憎悪と和解の大江山—あるイギリス兵捕虜の手記—』（彩流社、2009年）を輪読し、後学期には第2次世界大戦に関連する遺構や施設を訪れました。2025年度の主な訪問先は次の通りです：琴引浜、琴引浜鳴き砂文化館、アミティ丹後、網野銚子山古墳、京丹後市立郷土資料館（京丹後市）、伊根観光協会「舟屋ガイドとめぐる、まるごと伊根体験」参加（伊根町）、元伊勢籠神社、傘松公園（宮津市）、治水記念館、丹波生活衣館、福知山城、佐藤太清記念美術館、フクレル、三段池公園（福知山市）、立命館大学国際平和ミュージアム（京都市）、旧大江山ニッケル鉱山精錬所跡、旧加悦町役場庁舎、旧尾藤家住宅、加悦鉄道資料館（与謝野町）、舞鶴引揚記念館、赤レンガ博物館（舞鶴市）

学びから得たこと・身につけたこと

私は京都府北部をフィールドとしたゼミ活動の中で、京丹後市の琴引浜が最も印象に残っています。美しい景観だけでなく、鳴き砂を守るために地域住民や行政が主体となって環境保全に取り組んでいることを現地で知りました。地域資源は自然に存在するものではなく、人の関わりや継続的な努力によって維持されていることを実感し、地域を見る視点が大きく変わった1年でした。この経験を活かし、今後も精力的に活動しようと思います。

外館朔也

1年間のゼミ活動では、北京都それぞれの市町について、事前調査、フィールドワークを通して、自分の視点についてまとめて発表し、それについての反省や、他の人のよい発表、自分にはない視点を参考に、地域へのさらなる広い視野を養いました。また、各市町を訪れた際の過疎化などの具体的な社会課題や、自然・歴史といった地域の資産を知ることができたと同時に、それに対する地域住民の取り組みについて学ぶことができました。

藤下謙史郎

キャリアパスを意識した能力開発

教員名 加藤好雄



学修のねらい

ゼミ活動では、クラウド上で資料・タスク・学習記録・スケジュールを一つの画面で整理でき、一覧で見たり進み具合を管理したりできるワークスペースを使います。これにより、学習の記録やタスク、予定をまとめて管理し、資格試験などの進捗を残しながら、卒業までを見据えた計画づくりと実行を進めます。あわせて、生成AIを学習サポートとして活用し、講義内容をAI講義ノートとして整理したり、外部試験や資格の勉強を効率よく進めたりしながら、自分に合った学習方法を見つけしていきます。さらに、レポート作成に必要な文章の書き方（アカデミックライティング）の基礎もAIを活用して身につけます。3年次以降は英語で資料作成や連絡を行う場面も想定されるため、基礎的な英語力の強化にも取り組みます。加えて、国際体験に向けたスケジュールを立てて実行したり、興味のある業界・企業を調べたりしながら、自分の進路を意識した能力開発を実施します。

学びから得たこと・身につけたこと

生成AIを活用した講義ノートの整理や、アカデミックライティングの基礎習得を通じ、効率的な学習方法を確立しました。また、国際体験に向けた計画立案やTOEIC対策に取り組み、3年次以降の英語での活動を見据えた基礎力を強化できました。これらの経験は、自律的に能力開発を進める重要性を学ぶ貴重な機会となりました。今回得た知見を活かし、進路実現に向けて今後も継続的な自己研鑽に努めます。

梅原陽愛

業界・企業研究を進める中で、就職活動に有効な宅建士の資格取得学習にも取り組みを実施しました。学習効率を高めるためNotionで資料・メモ・タスク・学習記録・予定を一元管理し、進捗を可視化させ、その結果、弱点把握と計画修正が迅速になり、研究と学習を両立して継続できる実行力が身につきました。学習ログを残すことで振り返りが容易になり、次週の目標設定も具体化をすることができました。

千葉多加良

地域と言語・産業を通じた「郷土」の再考と実証的分析の深化

教員名 神谷達夫



学修のねらい

本授業は、地域に根ざした言語および産業を題材として、日常的に用いている語や身近な地域資源を対象に、表層的理解を超えて構造的に分析する力を養うことを目的とします。龍郷町方言の色名研究では、標準語との意味範囲の差異や音変化の過程に着目し、語の成立を歴史的・音韻的観点から考察する姿勢を育成します。また、東北地方の産業構造の検討を通じて、地域特性の比較や背景要因の整理を行い、広い視野から地域を捉える力を涵養します。

さらに、本授業で得られた知見を特定地域に限定せず、他地域や他分野にも応用可能な分析枠組みとして位置づけることを重視します。言語や産業の差異を通して共通構造や普遍的傾向を見出す視点を養い、地域研究を汎地域的・比較的に展開する基礎を形成します。加えて、調査・資料収集・情報処理の過程で自らの技能的課題を自覚し、ICT活用能力や探究方法を主体的に改善していく姿勢を確立することを目標とします。

学びから得たこと・身につけたこと

龍郷町方言を調べて、色名のように日常的な語でも、標準語と同じ意味で使われるとは限らず、指示範囲が異なる場合があることを初めて知りました。また、「おーさ（青）」が単なる言い換えではなく、語源（awo）からw脱落や母音融合、長音化、さらに-saの付加といった音変化の積み重ねで成立している点は、調べなければ気づきませんでした。色名のような身近な語でも、語形や接尾要素に注目すると、母音体系の変化や語の成り立ちが見えてくる点が学びになりました。

且 楓夏

今年1年のゼミ活動を通して自分の故郷である東北地方に焦点を当て産業の仕組みについて大まかに理解することができました。地域ごとに産業の特色の違いも講義内で分かり面白いなと感じました。活動を続けるにあたって自分のパソコンを動かす力が足りないことに気づき、これからレベルアップをしたいと思います。また、実際に訪問したり東北大学の友人との会話をしたりすることで新しい知見を得て研究を発展させたいと思います。

長谷川健大

企業と地域

— 地域産業観光と経営戦略の観点から —

教員名 亀井省吾



学修のねらい

本演習は、地域産業ツアー企画の疑似体験および地域発グローバル企業の視察を通じ、企業と地域社会の関係を实地に理解することを目的としています。地域経営研究Ⅰでは、北近畿・京都市内の企業施設でフィールドワークを行い、体験型観光のプロセスをカスタマージャーニーとして構造化し、企画案として整理しました。地域経営研究Ⅱでは、グンゼ綾部本社記念館・博物館を訪問し、事業史を踏まえてドメイン戦略の変遷を事業ポートフォリオ・マトリクスで分析し、研究所の先端研究を題材に用途開発案を作成・提案しました。本演習ではゲストとして、地域起業家をはじめ、第一線で活躍するデザイナーや企業マネージャーを招聘し実施しています。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミでは、フィールドワークや各企業講義を通じてインプットを行い、地域ツアー案の作成やグンゼ社の新規事業案考案といったアウトプットまで一連の実践を経験しました。分析手法としてクロスSWOTや事業ポートフォリオを用いることで、実践的な分析力を身につけることができました。また、アウトプットの過程ではチームで協働する力を培い、意見交換を重ねることで、創造力や発想の幅・深まりが生まれることを学びました。

伊藤群晴

ゼミ活動で学んだことは、「問い」を起点に物事を捉え、実践を通して思考を深めることです。フレームワークによる企業分析や事例調査、フィールドワークを通じて、強みや課題を言語化し、戦略や事業として考える力が身につきました。また、議論を重ねる中で、多様な視点を取り入れることが新たな価値創造につながると実感しました。学びを通して、物事を一面的に捉えず、背景や関係性まで考える視野の広さを養うことができました。

妹尾隆玖

社会福祉の現場を知る

教員名 川島典子



学修のねらい

本ゼミは社会福祉の視座から地域課題を把握し、その解決方法を学ぶゼミです。2年生時は、まず社会福祉の現場を知るために福知山市内の高齢者福祉施設や、子育て支援サロン、宮津市の子育て支援センター、伊根町社会福祉協議会などと協働し見学させて頂いています。また、前学期はアカデミックライティングに慣れるために學術書の輪読を行い、後学期は卒論に関連したテーマの本を1冊ずつ読みました。さらに、認知症高齢者の家族を支える支援が足りないという地域課題を解決する方法や、自主防災活動に参加する女性リーダーが少ないという地域課題を解決する方法を政策提言すべくゼミ運営を行ってまいります。

学びから得たこと・身につけたこと

福知山市内の高齢者福祉施設である「グリーンピラ夜久野」や伊根町社会福祉協議会、子育て支援サロンの「NPO法人おひさまと風の子サロン」などを訪問し、地域福祉の現場を実際に見て学ぶことができた1年でした。それぞれの施設で、地域住民との関わり方に違いがあり、地域の特性に応じた支援が行われていることを実感しました。講義だけでは得られない現場の声や雰囲気を知ることで、地域福祉を身近なものとして考える力が身についたと思います。

藪内樹理哉

この1年、日常生活では味わうことができない貴重な体験を積むことができました。フィールドワークでは、福知山市の「おひさまと風の子サロン」を訪れましたが、利用者の親子がおらず施設の見学だけ行いました。そこで、スタッフさんから支援の仕組みを伺い、子育て支援の基盤を実感できました。また、「グリーンピラ夜久野」の特別養護老人ホームでは、入居さんの穏やかな日常とスタッフの細やかなケアに心を動かされました。ゼミ旅行では、皆と過ごした時間が忘れられず、信頼できる仲間ができたのも大きな経験であったと感じました。前学期・後学期で行った輪読では、初めての頃の不安から自信を持って意見を述べられるようになり、自分の思考力と理解力が確実に成長したと感じました。

上松菜尋

若年層における就職先選択決定要因に関する研究 地域における高齢者にとってのサードプレイスのあり方に関する研究

教員名 木村昭興



学修のねらい

本演習は、地域コミュニティを構成する民間企業の経営状況を把握し、会計の視点から行政の役割について考察することを目的としています。具体的には、①財務会計の仕組みの理解と、②財務情報および非財務情報を用いた定量的・定性的な分析手法の修得に焦点を当てています。①では、財務会計が果たす情報提供機能を理解するとともに、分析結果を分かりやすく伝えるためのプレゼンスキルの向上を図りました。②では、各種分析手法を学んだうえで、インタビュー調査を実施し、地域が抱える課題の把握に取り組みました。

今年度は、若年層における就職先選択の決定要因に関する研究および、地域における高齢者にとってのサードプレイスのあり方に関する研究をテーマに設定し、調査・分析を行いました。これらの調査・分析結果を踏まえ、地域課題に対する示唆を整理し、京都で開催された政策研究交流大会において研究成果を報告しました。

学びから得たこと・身につけたこと

高齢者にとってのサードプレイスをテーマに調査・研究を行い、地域課題を整理しながら論理的に分析・考察する力を身につけました。インタビュー調査や発表を通して、調査結果を体系的にまとめ、自分の考えを分かりやすく伝える表現力を身につけることができました。また、得られた定性データをもとに、地域の実情を客観的に捉え、根拠に基づいて考察する姿勢の重要性を学びました。

岡田愛美

本研究を通じて、大学生が就職先を決める際に重視する意見や実際にUターン就職した人の意見に違いがあることを理解しました。アンケート項目やヒアリング内容を決める際に、仮説をたてることの重要性を学びました。また、集めたデータを分析する手法や統計的な視点からのアプローチを学ぶことができました。報告では、視覚的に伝えるプレゼンの難しさや、適切な質疑応答の難しさを実感しました。

田村洋平

フィールドワークを通じた地域課題へのアプローチと検証

教員名 小山元孝



学修のねらい

本演習はフィールドワークを通じて地域課題を発見し、その解決に向けた調査・研究の初歩的なスキルを身につけることが目的でした。前学期は豊岡市城崎町を対象に、過去の文献などから自ら調査計画を立案し、現地での調査を行いました。具体的には伝統工芸品の後継者問題、子育て世代に優しい観光地づくりなどのテーマが取り上げられ、自らの体験や聞き取り調査をもとにした調査報告がありました。後学期は豊岡市出石町を選定し、前学期と同様に文献講読、調査計画の立案、現地調査を行いました。いずれも理論的な研究と現地での実践を交え、両者をバランスよく身につけることに留意しました。この他、京丹後市で開催されている「こまねこまつり」への参加、またまち歩き企画「てくてく我がまち再発見・こまねこウォーク」では参加者のアテンド役として参加するなど、地域住民との協働により企画・運営に参画しました。

学びから得たこと・身につけたこと

まち歩きの参加者の方々は京丹後市に興味がある方や歴史に興味がある方、散歩をゆっくりしたい方など参加目的がさまざまに興味深いなと思いました。ガイドブックに関する話や音をテーマにした理由を話すことができたところもよかったです。また、私自身が歴史に疎いことも原因ですが、参加者の熱意や、やる気が思った以上にあり、少しでも歴史に詳しくなったら、より深いお話をすることができたのかなと思いました。

伊藤寧希

「こまねこまつり」では子どもから年配の方まで参加していただき、多くの方に関心を持ってもらえたことを実感し、次回への準備や対応の重要性も感じました。反省点としては、一人のスタッフが複数人を同時に対応する状況が続き、休憩をこまめにとることができなかつたことが挙げられます。事前に担当の割り振りや定員の上限を決めておけば、もう少しスムーズに運営できたのではないかと感じています。

牧本菜々香

観光地域づくりの観点から海の京都観光圏を考える

教員名 佐藤 充



学修のねらい

本演習は、観光分野の学術的な文献から理論的な枠組みを学習し、海の京都観光圏を対象にして、観光地域づくりの現状と課題を理解するものです。

1年間を通して、文献輪読による理論学習だけでなく、フィールドワークにも取り組んでもらうことで、海の京都観光圏内における観光地域づくりの現場での経験も大切にしました。「理論」と「実践」を往還させ、知識だけでなく、経験だけではない、両者を結び付ける学びを重視しました。

地域協働の観点からは、フィールドワークにおいて、京丹後市の夕日ヶ浦観光協会と伊根町の観光関連事業者と連携したプロジェクトを実施しました。2・3年生の合同チームを作り、地域住民と観光客向けのイベントへの参画、公式 SNS を活用したデジタルマーケティング、観光者向けのお土産づくりを行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度のゼミで2つのことを学びました。1つ目は「疑う」ということです。1年間を通して行った文献講読で筆者の主張を読み取るとともにその主張は本当に正しいのかを議論することで、情報を疑うということを体感しました。2つ目は「フィールドワークの在り方」です。現地に取材に行くために下調べやスケジュール設定など自らの手で取材を組み立てる経験をしたことによってより効果的なフィールドワークができました。

岡地慧明

文献講読では、観光分野の基礎知識や観光ブランドづくりに関する文献を検討し、文献に書かれていることに対し疑問を持つことの大切さを学びました。伊根町のお土産づくりでは、フィールドワークを通して伊根町の観光の実態や魅力を知ることができました。また、幅広い層に手に取ってもらえるお土産を考えることの難しさも実感しました。この1年を通して今後の活動や研究の方向性について考えることができました。

伊藤笑里

問題意識をもって 学修に勤しむ

教員名 佐藤 恵



学修のねらい

平素から批判的視点をもつことと、自ら考える力の習得を最大の課題としました。そのため、興味をもった新聞記事を他のゼミ生に紹介する機会を定期的に課しました。こうした発表は、自らの考えをまとめ、それを人に伝える訓練の場として設けられました。また、興味のある領域と問題意識をもとに、関連文献の review を学ばせました。学生は、得られた知識から概念の整理と構造化に取り組みました。その成果は、成果発表用ポスターとしてまとめられました。これは、次年度以降に必要な研究の作法を学ぶ場となっています。

今年度は、医療にこだわらず、地域経営の視点を持つ機会を設けました。7月に、京都の重要伝統的建造物群保存地区を見学し、その維持の在り方について話し合いました。2月末には、奈良市と橿原市を訪問しました。橿原市では、今井町町並み保存会会長のお話を伺いました。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度は、主に2つのことに取り組みました。1つ目は、自分が興味を持った新聞記事の要旨をまとめ、ゼミで発表したことです。分かりやすく伝えるために、記事の詳細まで調べ、深く理解するように努めました。その過程で自分の興味・関心が広がりました。2つ目は、自分の問題意識にそって先行文献を調査しました。先行文献を読み込んでいくにつれ、自分の問題意識が明確になり、次年度からの研究に繋がると期待できました。

松井陽平

私は、物事の本質を深く考え、先の展開まで想定する姿勢を学びました。説明には、自分自身がその内容を十分に理解していることが不可欠です。そのため、新聞や論文の要約発表は、専門用語や社会的背景、発言の意図を調べる必要がありました。さらに、聞き手の受け止め方や想定される質問を考え、事前に回答を準備することが求められました。以上の経験から、相手に分かりやすく伝えるための基本姿勢を身に付けることができました。

中尾直歩

1人1プロジェクトリーダー 制による産学公NPO連携 (臨床政策実践) ①

教員名 杉岡秀紀



学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、文献購読で専門の基礎を固めつつ、近隣の自治体・企業・NPO等と連携しながら、臨床政策実践(PBL)に取り組みました。

文献輪読は、秋吉貴雄『入門 公共政策学』を輪読。

PBLは、①5大学インゼミ(岩手県立大・神戸大・京都産業大・新潟医療福祉大・本学)・LINKtopos、②高大連携(高校生みらい会議)、③主催者教育(丹波市議会・福知山市議会)、④舞鶴プロジェクト(公共施設)、⑤宮津プロジェクト(上宮津)、⑥政策コンペ(京都府警察「ポリス&カレッジ」、産学連携学会)などのプロジェクトを1人1プロジェクトリーダー制で進めました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミではたくさんのプロジェクトに参加し、経験を積むことができました。特に話し合いをまとめる役割の経験が積めました。また、担当した舞鶴プロジェクトにおいて、私は広報のためのポスターを制作するという責任ある役目を任せていただきました。アイデア出しや読みやすいような工夫など難しいことも多々ありましたが、新しいスキルが身についたと思います。

上田隆貴

様々な地域に入り込み活動し、その活動内容は多岐に渡り充実したゼミ活動を行うことができました。編入生ということもあり、これまで地域に入り込んで活動することはなかったため、当初は地域の方や高校生とうまく関わらず苦労することもありましたが、ゼミ活動が後半になるにつれて積極的に地域の方に話したり、高校生ともうまく対話できるようになりました。ゼミを通して、地域との関わり方を学ぶことができました。

原井優花

災害と防災に関する 地域実践に向けて

教員名 大門大朗



学修のねらい

本演習では、地域社会に大きな影響を与える「災害」がもたらす様々な課題について、社会学や社会心理学（グループ・ダイナミクス）の立場から実践的にアプローチできるようになることを目指しました。前学期では、まず、防災・減災に関する文献の輪読や防災のプロジェクト活動を中心として、防災・減災に関する基礎知識を学び、災害がもたらす地域への影響や、災害情報や防災教育の批判的側面について学びました。後学期からは、各自の関心に合わせて、福知山市内でのフィールドワーク、能登半島地震被災地への訪問などを通して、地域への影響について調査・情報収集、実践活動を行い、より具体的な災害や防災に関する理解を深めました。これらの地域での実践活動をもとに、グループ・ダイナミクスの立場から、事例や活動をまとめ、災害・防災がもたらす地域への意味について理解を深めました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は、次世代へつなぐ支援のバトンプロジェクトに参加し、京都府立福知山高等学校、七福ふっこう隊と共に、能登半島にボランティアへ行きました。被災地では、サロン活動や輪投げ大会、コンサートなど数々のイベントが行われており、被災者の方々には、笑顔があふれていました。そのことから、ボランティアには、復興を支援するだけでなく、震災で失われた被災者の方々の笑顔を取り戻すことも重要だと分かりました。

野倉颯人

庵我地区のフィールドワークを通じて、地域を多角的に捉える視点を身につけることができたと感じています。庵我地区で行われたイベントに参加し、会場の設営や飲食販売に取り組みました。イベント自体は防災に直接関係するものではありませんでしたが、防災の観点から住民同士の関わりや地域の雰囲気を見ることができました。その経験を通して、日常的な地域活動が地域防災と深く結びついていることを学びました。

上佐麻結

地域と協働しよう。 小さな社会実験を やってみよう。

教員名 谷口知弘



学修のねらい

谷口ゼミでは、多様な価値観を持った人々が機嫌よく暮らせるまちづくりを目指して実践的研究を行っています。

2年生ゼミは、地域資源を活かしたまちづくりの理論と技法について協働実践を通して学びました。関心のテーマに集って2チームづくり、地域の関係者を巻き込んだ小さな社会実験を計画・実践するプロジェクトを運営し実践力を身につけました。

PJ1) まちのすきまプロジェクト～レンタルスペース、フリースペースを「まちのすきま」と名付け、使ってみてその魅力を伝え、場所を探す人と「まちのすきま」をつなぐ試み<協働：furimama*、f's kitchen >

PJ2) 謎解き探検団プロジェクト～福知山城の謎解き巡り「明智光秀からの挑戦状！」を企画、福知山城や福知山の歴史への関心を喚起する試み<協働：f's kitchen、in enjoy >

これらの活動は「まちかどキャンパス吹風舎」を拠点に地域と関わり試みました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動から実践的な学びの重要性を実感しました。例えば、新たにイベントを主催しようとした時に、どうすれば自分たちの理想を実現できるかについて、個人やチームで考えることはもちろん重要ですが、その結果は想像の範囲を出ることはありません。まず行動に移して、実践の中で改善していくことで、回数を重ねるごとに改善を図ることができる、ということを学びました。思い立ったら即座に行動する力の重要性が理解できました。

竜田 蒼（まちのすきまプロジェクト）

良いイベントを作るためには、どこの誰を対象として、何のためにイベントを行うのか、参加者には何を得てもらいたいのか、などをしっかりと考え明確にすることが大切だということを知りました。また、フィールドワークで参加者側としてイベントを体験することで、良いアイデアを得ることができました。このことから、実際に体験してみることの重要性に気づくことができました。

荒賀ゆな（謎解き探検団プロジェクト）

地域資源の価値再構築と提案型マーケティング実践

教員名 張 明軍



学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、京都府中丹地域の農産加工品を対象に、実践的なマーケティング調査および商品価値向上の取り組みを行いました。具体的には、イベント出展や代理販売を通じた対面販売実習、来場者への聞き取り調査、販売実績の分析を実施しました。また、提案型消費を促進する視点から、学生がAIも活用しながらアレンジレシピを開発し、消費者目線に立った商品訴求方法を検討しました。本演習は、調査設計から実践、分析、提案までを一貫して経験することで、地域資源を活かした市場拡大戦略を構想・実行できる力の育成を目的としています。

学びから得たこと・身につけたこと

農産加工品の出展販売では、他の出店者や来場者との交流を通じて、どのような層に需要があるのかを具体的に把握することができ、市場を意識する視点を養うことができました。また、他団体の活動や工夫を間近で観察することで、自分たちの取り組みを見直す機会となり、視野を広げる姿勢も身につきました。アレンジレシピの作成では、AIを活用することで発想の幅が広がり、新たな可能性を実感しました。

井上慎也

最も学びになったと感じているのは、農産加工品の出展販売です。あべのハルカスや大学のオープンキャンパスでの出展販売を経験したことで、購入される方がどのようなニーズを持っているのか、また、どのような勧め方をすると魅力を感じただけなのかについて、より深く考えるようになりました。この経験を通じて、指示されたことを行うだけでなく、受け手のニーズを踏まえて主体的に行動することの重要性を学びました。

椿 すず花

交流観光等による多自然圏（非大都市圏）の地域活性化

教員名 中尾誠二



学修のねらい

・5/31-6/1 福知山市夜久野町「大柏公民館」
・7/11-21 間の一泊二日5回 福知山市上六人部「教育民泊お試し受入家庭5軒」で全員
・8/3-4 上六人部「朝倉さん宅」で1人
・8/21-23 兵庫/養父市「あゆ公園」で1人
・9/14-15 南丹市美山町「旧知井小学校舎」で2人(as 軽音サークル)
・2026/1/24-25 上六人部「朝倉さん別宅」で4人(+3年生1人)
・1/24-25 大阪/柏原市「GuestHouse Bed&Bicycle」で5人
・2/3-4 夜久野「農家民宿&トライアルハウス米ya」で9人
・2/7-8 大阪市「AND HOSTEL HommachiEast」で5人
・2/7-8 京都市「B&B Hachi」で1人
・2/9-10 大阪市「和風旅館 上本町」で2人
が、それぞれ宿泊を伴ったフィールドワーク（参与観察等）を行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動を通して、移住者は地域で受け入れる側の存在を必要とし、受け入れる側もまた移住者を大切な存在として感じていることに気づきました。両者は地域にとって相互に欠かせない関係にあり、地域イベントや交流会・お祭りのような双方が出会う場は、今後もなくしてはいけないものだ学びました。このような機会は地域内住民の交流会にも欠かすことの出来ない要素であることも学びました。

青池一華

ゼミ活動を通して、地域づくりは実際に現地を歩き、人と関わる中で育まれるものだ学びました。イベント準備や農作業体験、地域行事への参加を通じて、地域の方々の思いや暮らしに触れ、対話や信頼関係の積み重ねが重要であると実感しました。また、臨機応変に対応する力や、自分から関わろうとする姿勢の大切さも学ぶことができました。今後はこの学びを生かし、自ら考え行動しながら、より深く地域と向き合いたいです。

仲村真奈

教育（特に学校経営）における多様なテーマに関する基礎理解

教員名 福島真治



学修のねらい

学校経営に焦点を当て、その概要や特質・直面している課題などを、主に文献調査を中心に学修します。加えて、教育関係者と直接対話する機会を設け、教育機関・学校組織の現状について包括的に理解していくことを目指し、その中で得られた知見・課題を、実際の社会にどのように活かすのか、それを考えるための基盤を構築することが目的です。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

- ・前学期は、「教育行財政」「学校経営」などに関して、書籍や論文を中心に学修しました。
- ・後学期は、上記学習から学生が自身の関心に合わせて個別のテーマ（「教員の働き方と部活動指導」「不登校要因とその対策」「カントの教育論」「小学校へのICT支援員の配置」「教師の労働環境と学びの関係」「リカレント教育に関する課題」）を設定し、それらに関する先行研究の整理・フィールド調査などを実施し、その成果をレポート・ポスターにまとめました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミの活動を通して、教員の働き方改革、とくに部活動指導の在り方について、文献などを用いて調査しました。現場の負担構造や制度的課題を知り、理想論ではなく地域や外部人材との連携など、現実的な解決策を考える視点が身につきました。また、教育課題を地域経営の問題として捉え、多角的な視点を持ち分析する力や、自分の考えを根拠をもってまとめ、発信する力を養うことにつながりました。

尾崎紗成

前学期はゼミ生で教育に関する疑問や、知りたいことを出し合い、それらについて先生が解説して下さいました。

後学期では、それらを活かし、個人のテーマで研究しました。私は、不登校の要因に対して、国の不登校対策が有効であるかという問いで研究に取り組んでいます。国の調査によって考えられる不登校の要因と、国の不登校対策を把握することができたので、今後、要因と対策の関連について研究したいと考えています。

坂田 星

病院情報システムの重要性を病院見学と医療DXの現状分析から学ぶ

教員名 星 雅文



学修のねらい

当2年ゼミでは、アカデミックスキルの向上を目指して医療情報・病院経営にかかわる文献抄読の実施と同時に、AccessやExcelなどを用いてデータを収集し処理する技術と経験を積みまます。抄読会では田原・日月(2021)「新たな病院原価計算を創る：複雑系との対話」を取り上げ、医療に対する複雑系としてのアプローチと医療情報システムの貢献について学修しました。研究活動では、現在政府が推進している医療DXの現状を探るために、全国の厚生局が公表している施設基準のデータを取得し、データクレンジングから分析を行いました。この分析結果は、2026年の医療情報学連合大会において発表する予定です。昨年12月には大阪市内に所在する医療機関の見学を行いました。一般急性期の病床に加え療養病床を有する特殊な見学病院において、学生は電子カルテの運用場面や病床管理の大変さを学び、病院情報システムの重要性を実感しました。

学びから得たこと・身につけたこと

抄読会では、医療が不確実であり複雑系の性質を持つものであること、そして診療データからその性質を示すことができる可能性について初めて知りました。さらに、医療情報システムを利用する意味は業務効率化だけでなく、データを利用して病院の医療や経営の質を高めていくことが重要であると学びました。また病院見学を通して、自分たちが学んでいる知識がどのように将来に繋がるのかを具体的に知ることができました。

学生A（匿名希望）

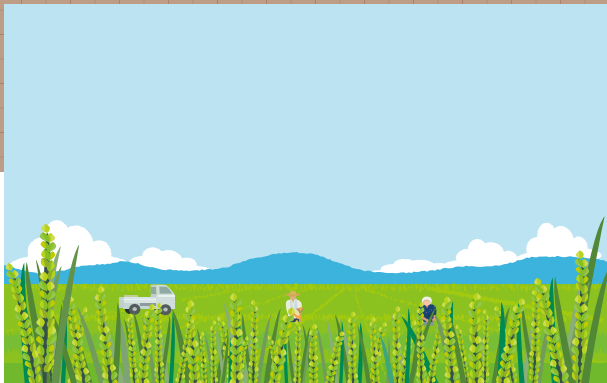
病院見学では、これまで授業で学んでいた病院内の仕組みや実際の事務の仕事内容、仕事環境を見学することで目指す将来について明確に考えるようになりました。研究活動では、厚生労働省が公開している施設基準のデータから、医療機関における情報化の現状など、様々なことが把握できる可能性を感じることができました。また、データの精度確認のような地道な作業を行うことが利用しやすいデータにつながることを実感しました。

学生B（匿名希望）

「市町村産業連関表」の 作成に関する方法論の開発

— 耕種農業部門の移輸出率の推計を中心に —

教員名 三好ゆう



学修のねらい

『市町村産業連関表』作成に関する方法論の開発」をテーマに、とりわけ耕種農業部門の移輸出率の推計について考察しました。きっかけは、農業関係者の方との談話にて「中丹地域の一等米比率は極端に低い」ことを知り、「一等米比率は移出率と関係するのではないか」との自発的な発想から始まっています。

まずは前学期と夏休みを通じて先行研究の整理を行いつつ、Excelを用いて市町村産業連関表を作成し、基礎理論と基礎的技術の習得に注力しました。後学期からは先行研究の異同点を整理しつつ、耕種農業部門について全市町村で一律の移輸出率を用いることの問題点はどこにあるのかを考察しました。種々の統計データを基に耕種農業部門の特殊性を表現したり、内発的発展論の観点から移出産業としての限界を指摘したりするなど、多面的な視野から思考した点は高く評価します。また、最終的に論文にまとめるまでに到った意欲は称賛したいと思います。

学びから得たこと・身につけたこと

本年度は、地域経済に関する著書の要約から始まりました。前学期の終わりには多少なりとレジュメをまとめる力を身に付け、内発的発展論を理解することができました。後学期は平成27年における高知県34市町村の産業連関表の作成に取り組みました。その過程で一番苦勞した点は産業連関表と経済センサスの部門を対応させる作業で、Wチェックに手間取らせてしまいました。何度もやり直し、作成手順を行きつ戻りつ、出来たと思っても、どうしても値が合いませんでした。全体的にもミスが多く、Wチェックを頼むのが心苦しく、ミスを順に直していく作業がとても大変でした。

1年間のゼミ活動を通じて産業連関表の作成方法と耕種農業の多様性を学ぶことができ、産業連関表の必要性や作成する難しさ、用語に注意して逐一調べる重要性を学びました。移出率の推計を通して様々な手法を学んだので、今後は実際に使用してどのような結果になるのか調べたいです。

藤原礼乃

地域経営研究Ⅰ・Ⅱ (3年生)



地域課題の発見と 解決策の検討

—ゼミ生全員でひとつの研究課題に取り組む—

教員名 大谷 杏



学修のねらい

3年生のゼミでは、学生自らが主に北近畿地域が抱える問題について考え、ゼミ単位でひとつの研究課題に取り組みます。今年も学生が主体となり、役割分担を決め、先行研究の整理と共に綿密な計画を立て、7月より天橋立周辺の観光事業者の皆様、海外からの観光客の皆様にご協力いただき、アンケート調査や現地でのインタビュー調査を実施しました。その成果を「観光地における多言語サポーターの提案—天橋立周辺の現地調査から—」と題した論文にまとめ、12月に龍谷大学深草キャンパスで行われた大学コンソーシアム京都主催「京都から発信する政策研究交流大会」で発表しました。当日の発表では、調査で得た知見をもとに、自治体と観光事業者、そして大学生の協働的な取り組みである「多言語サポーター参画構想」の提案を口頭で行いました。また、他都市との比較検討のため、多言語表示の先行研究のあった名古屋市内においても現地調査を実施しました。

学びから得たこと・身につけたこと

3年次では、大学コンソーシアム京都にて論文を発表するため、その作成をメンバー全員で取り組みました。現地調査の場として天橋立を選び、多言語対応の現状を調査しました。地域事業者へのアポ取り、アンケート調査を通して実際に調査をしないとわからないことを多く学びました。現地調査前から調査後にすることの流れを学べたと思っています。そして作成した論文は、大学コンソーシアム京都で発表することができました。

坂口野原

「京都から発信する政策研究交流大会」に向けて、テーマ設定、実地調査、論文・スライド作成を行いました。テーマは「観光地での多言語サポーターの提案」とし、実地調査では店舗へ自分たちでアポイントメントを取り、協力を依頼する中で、一つの研究に係る調査の大変さを学びました。また大会では、他大学の発表を通して、原稿に頼らず聴者の目を見て語りかける姿勢から、伝わる発表に必要な態度や工夫に気づくことができました。

友浦好美

キャリアパスを 意識した能力開発

教員名 加藤好雄



学修のねらい

本年度の3年次演習では、2年次の取り組みを土台として、生成AIを活用した学習効率の向上と推論能力の養成を継続しつつ、英語運用力と異文化理解をより実践的に高めることを目標としました。また、マーケティングカンファレンスへの参加を視野に入れながら基礎統計解析を修得し、今後のマーケティング研究に必要な実務スキルの基盤を習得しました。その際、MOOCsも活用し、海外での研究手法や基礎的知識を英語で学習することで、学術的な標準に触れながら理解を深めました。さらに、個人の学習進度や興味に応じてTOEIC対策や海外渡航による国際体験にも力を入れ、国際舞台でのコミュニケーション力を強化しました。本演習では、学びを計画・実行・記録・改善するサイクルを回し、自律的に学びを深める姿勢を確立するとともに、就職活動に向けて自己の強みや経験を言語化し、進路選択に活かすことも重視しています。

学びから得たこと・身につけたこと

卒業研究に向けて先行研究調査を進める中で、対話型アンケートツールの構想や研究の展望を具体化し、実践的な統計解析力を高めることを目標に学修しました。アメリカ心理学会の公開教材を活用し、卒業研究の核となる定性・定量手法の基礎から混合研究の可能性まで理解を深めました。学びを記録しインプットする計画・実行・改善のサイクルを確立し、就職活動においても強みとして経験を言語化でき、自信につながりました。

後藤蔵之介

3年次は、国際体験を軸に不確実な環境下での判断力と実行力を身につけました。約45日間の日本—オーストラリア縦断旅では、国境越えや移動計画の変更直面し、その都度、情報を整理し優先順位を定めて行動しました。また、MOOCsの講義を受講し、専門的な内容を英語で学ぶことで、実践的な英語運用力の向上につなげました。これらの経験から、理論と実践を往還しながら学びを深めることができました。

中川立希

多領域にわたる 実証的分析と 方法論的統合

教員名 神谷達夫



学修のねらい

本授業は、感覚的・経験的に理解されがちな事象を、客観的かつ構造的に分析する力を養うことを目的とします。音楽刺激と脳波の関係を測定し効果量によって検証する研究、パーソナルカラーの数値化、SNS アルゴリズムの分析、市バス運行の効率化、地域課題に基づく政策提案研究など、多様な社会的事象を対象とした実証的探究を展開し、それらをデータとして扱う方法論を学びます。これらの取組は、分析手法の習得にとどまらず、成果を社会的文脈で検証する段階へと発展します。

特に、政策コンペ（京都から発信する政策研究交流大会）での優勝は、データ分析と論理構成に基づく提案が外部評価でも妥当性を有することを示す成果です。さらに、ヒアリングや地域連携、外部発表を通じて研究成果を社会へ接続する視点を獲得します。各自がテーマ設定から検証、改善までを自律的に進める経験を重ねることで、分野横断的に応用可能な総合的探究力の形成をねらいとします。

学びから得たこと・身につけたこと

今回のゼミ活動では、音楽が脳に与える影響について脳波測定を用いて実験を行いました。協和音や不協和音、ノイズ音など異なる音楽刺激によって脳波に変化がみられ、音楽が人の心身に影響を与えていることを客観的に理解できました。特に、協和音では Calm% が大きく上昇し、効果量からもリラックス効果が確認されたことから、音楽の影響を数値として実感できました。ゼミ活動を通じ、音楽と脳活動の関係を客観的に分析する重要性を学びました。

大槻紗那

私は2年次に引き続き、パーソナルカラーをテーマとした研究に取り組んでいます。今年度は研究の客観性を高めるため、マネキンを用いた実験や RGB 値について理解を深めています。主観に左右されやすいとされるパーソナルカラーを数値的に捉えることで、より再現性のある研究を目指しています。個人の研究に注力できる本ゼミの特徴を活かし、このテーマを卒業研究へと発展させていきたいと考えています。

半田真菜美

企業活動と社会課題 ービジネスエコシステムと デザイン思考の観点からー

教員名 亀井省吾



学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、企業活動と社会課題の関係性について、フィールドワークのほか、経営者やマネージャーとのディスカッションから実践的に学ぶことを目的にしています。地域経営研究Ⅰでは、NEXT 産業創造プログラムの事例分析を通じて、「地域ビジネスエコシステムにおける価値共創メカニズム」について考察しました。なお、その成果は、情報社会学会 2025 年度年次研究発表大会 WIP 部門にて発表し、学会ホームページに論文掲載されています。地域経営研究Ⅱでは、業界第一線で活躍するデザイナーをゲスト招聘しデザイン思考について学び、卒業研究に向けたテーマ設定を行っています。

学びから得たこと・身につけたこと

前学期は、学会論文の執筆・発表に取り組み、半構造化インタビューを通して、論理的に物事を分析する力を養うことができました。その結果、地域ビジネスエコシステムへの理解がより深まり、チームで協力しながら成果をまとめ上げることの重要性も実感しました。後学期はデザイン思考講義で「IKIGAI」について考え、自身を見つめ直す良いきっかけとなりました。これらの学びを、卒業研究に生かしていきたいと考えています。

濱本菜那

ゼミ活動では、学会論文の執筆と発表、デザイン思考について取り組みました。学会論文の執筆では、半構造化インタビューを通じて、物事を整理する力やまとめる力が身に付きました。デザイン思考の講義では、自らの「問い」を改めて考え、「かたち」での表現の仕方や、自分の「IKIGAI」と照らし合わせて考えるなど、より「問い」を深めることができました。この経験を活用して、卒業論文に活かしていきたいと思えます。

松本悠誠

社会福祉の視座から 解決する地域課題

教員名 川島典子



学修のねらい

本ゼミは社会福祉の視座から地域課題を把握し、その解決方法を学ぶゼミです。前学期はアカデミックライティングに慣れるために学術書の輪読を行い、後学期はより卒論に関連したテーマの参考文献を1冊ずつ読み、卒論執筆に備えています。さらに、福知山市と協働し、福知山市の防災の歴史を知るためのフィールドワークにも出ました。就職支援のためのキャリア支援にも力を入れています。今年は、親なき後の障害者支援、山火事に関する防災、子育て支援、多文化共生、認知症と地域共生社会、長寿社会の交通過疎問題などを各々のテーマとして学びを深めました。

学びから得たこと・身につけたこと

福知山市治水記念館の訪問を通して、由良川の氾濫リスクや過去の災害について学び、個人だけでなく地域全体で備える防災の重要性を改めて実感しました。前学期の輪読では、地域福祉における結合型SCと橋渡し型SCそれぞれの強みや役割の違いを学びました。後学期は卒論のテーマに関連する学術本を各自で選んで発表したことで、他学生の発表から新たな視点を得るとともに、自身の発表へのフィードバックも受けられ、今後の卒論執筆に向けた大きな糧となりました。

奥田美那

ゼミでは輪読とフィールドワークを行いました。フィールドワークでは治水記念館と桃映地域公民館を訪れ、福知山市の水害と防災について学習しました。これまでの被災の経験を活かし、地域の特徴に合った防災を地域住民主体で行うことの重要性を学びました。後学期の輪読では卒業研究に向けた学術本を選び発表を行いました。卒業論文の書き方や関心のある分野を詳しく学ぶことができ、早い段階でテーマや方向性を固めることができました。

越智清香

若年層における就職先選択 決定要因に関する研究 地域における高齢者にとってのサード プレイスのあり方に関する研究

教員名 木村昭興



学修のねらい

本演習は、地域コミュニティを構成する民間企業の経営状況を把握し、会計の視点から行政の役割について考察することを目的としています。具体的には、①財務会計の仕組みの理解と、②財務情報および非財務情報を用いた定量的・定性的な分析手法の修得に焦点を当てています。①では、財務会計が果たす情報提供機能を理解するとともに、分析結果を分かりやすく伝えるためのプレゼンスキルの向上を図りました。②では、各種分析手法を学んだうえで、インタビュー調査を実施し、地域が抱える課題の把握に取り組みました。

今年度は、若年層における就職先選択の決定要因に関する研究および地域における高齢者にとってのサードプレイスのあり方に関する研究をテーマに設定し、調査・分析を行いました。これらの調査・分析結果を踏まえ、地域課題に対する示唆を整理し、京都で開催された政策研究交流大会において研究成果を報告しました。

学びから得たこと・身につけたこと

本研究を通じて、高齢者にとってのサードプレイスは、単なる居場所ではなく、人とのつながりや役割意識を得られる場であることを学びました。インタビュー調査により、高齢者の生活背景や地域との関わり方を丁寧に聞き取り、定性的情報を整理・分析する力が身につきました。また、地域資源の活用や行政支援のあり方について、会計や政策の視点から考察する重要性を実感しました。

佐藤寧来

本研究を通じて、就職先選択には個人ごとに異なる選好や行動パターンがあることを分析から明らかにし、それらを視覚的に整理・把握する力を身につけました。若年層の就職先選択は、賃金や勤務地だけでなく、育った環境や将来像への共感など、多様な要因が複合的に影響していることを学びました。また、インタビュー調査を通じて、定性的情報を根拠に分かりやすく伝える重要性を理解しました。

三木日菜子

地域資源を活かした 住民との協働活動

教員名 小山元孝



学修のねらい

本演習では、京丹後市峰山町で開催される「こまねこまつり」を通じ、住民と学生との協働により地域資源の活用手法を検討し実践することを目的に行いました。この祭りは、金刀比羅神社に石製の狛猫が奉納されていることから、ネコと丹後の特産品である丹後ちりめんをキーワードに2017年から始まったイベントです。本年度は「こまねこ狂言会」でのコラボ企画と端切れを利用した「猫型コースターづくりワークショップ」、まち歩き企画においてアテンド役として参加したほか、丹後ちりめんを使ったガイドブックの作成に携わりました。運営に関わったスタッフとの反省会のなかでは、「学生と交流できるところに価値を感じるので、もっと学生にしかできないことをしてほしい」、「プロ目線ではなく学生目線のガイド等ができれば面白いのではないか」といった意見があり、今後の活動に向けて大変参考になるご意見をいただきました。

学びから得たこと・身につけたこと

今回の「こまねこまつり」では、2年生の時に参加した経験をうまく生かすことができました。規模感や客層等がある程度想定することができたことで、どうすれば上手くいきそうかと、企画のアイデアを膨らませることができました。当日は想定していたよりも多くの人に来てもらえて、午前中でほぼ準備していた数のコースターが売り切れるという繁盛ぶりで大満足の結果となりました。

那須寛太

巫女舞の経験があるからと狂言との学生コラボに手を挙げたものの、これまで狂言に触れたことがなかったためどのようにコラボできるのか不安でした。狂言と巫女舞は日本で古くから続いているという共通点を持っています。一方で異なる領域にある芸能でもあり、この2つの文化の組み合わせることで互いの違いを明確に知ることができ、自分自身にとっても新鮮な機会になったと思います。

川口真菜

観光地域づくりを 巡る諸問題を考える

教員名 佐藤 充



学修のねらい

本演習は、卒業研究の成果物（論文）を作成するために、学術研究のデザインとプロセスを学習し、自らの問題意識に立脚した研究計画の策定・実施するものでした。

1年間を通して、各学生は研究デザインに関する文献を読み、主に観光地域づくりに関する問題意識に基づいて、先行研究のサーベイや既往調査のデータの収集・分析に取り組みました。特に重視したのは、それぞれの学生が、自らの問題関心を突き詰めて、「学術上の問い」を導き出すことでした。

地域協働の観点からは、フィールドワークにおいて、京丹後市の夕日ヶ浦観光協会と伊根町の観光関連事業者と連携したプロジェクトを実施しました。2・3年生の合同チームを作り、地域住民と観光客向けのイベントへの参画、公式 SNS を活用したデジタルマーケティング、観光者向けのお土産づくりを行いました。

学びから得たこと・身につけたこと

今年度のゼミでは、夕日ヶ浦の Instagram の運営やキャンドルナイトのイベント企画・運営を通して、地域の魅力を実践的に発信する経験を積みました。特にグループの中心に立ち、意見をまとめながら率先して発言・行動することで、企画を主体的に推進した点が大きな学びです。また、ゼミでの議論やフィールドワークを通じて、自身の卒業論文についても視点を広げ、内容を深めることができましたと感じています。

伊木るり

今年度のゼミでは、観光協会の方々やゼミのメンバーと協力し、観光客のニーズ調査を行いながら、お土産開発に取り組みました。どのようなデザインやメッセージが喜ばれるかを話し合う中で、見た目や価格だけでなく、地域ならではのストーリーを込めることの重要性に気づきました。また、Instagram を活用してストーリー性を発信しましたが、限られた情報の中で購買行動につなげる発信の難しさを学びました。

鈴木仁菜

卒業論文執筆の基礎をつくる

教員名 佐藤 恵



学修のねらい

指導2年目の学生であることから、1年目の学修で身につけた考え方や知識をもとにした演習に取り組みました。学習のねらいは、自ら考え、自ら行動し、自らそれらを発信していく力の醸成です。

学生は、日常生活などから自ら問題点を見出し、テーマを決め、研究計画をたてて、それを実行しました。具体的には、社会調査法にのっとったアンケート調査です。今年度は、調査結果の取得まで到達しました。私は、適宜それに助言し、支援するにとどめました。

一方で、地域経営について広く学ぶために、京都の重要伝統的建造物群保存地区を見学し、その維持の在り方について話し合いました。2月末には、奈良市と橿原市を訪問しました。橿原市では、今井町並み保存会会長のお話を伺いました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は、今年度のゼミ活動を通して、「ホーディング」を研究しました。ホーディングは、モノの過剰な溜め込み行為です。モノを溜め込む行為自体は、日常的に見られます。先行研究は、ホーディングと心理特性の関連を報告していました。私は、心理特性の中でも性格に着目して、本学学生を対象としたホーディングの調査を行いました。今後は、得られたデータをもとに、性格とホーディングの関連を明らかにします。

山渡亜希

多様性のある社会について考える：異文化理解の視点から

教員名 渋谷節子



学修のねらい

文献購読及びディスカッションと地域でのフィールドワークにおける実践、個別研究を通して、文化・社会の多様性について異文化理解の視点から考え、自らの研究を通して多様性のある社会作りについて、その難しさや課題も含めて考察をしています。①異文化理解を実践し、文化・社会の多様性について考えるフィールドワーク、②バックボーンとなる異文化理解や文化・社会の多様性に関する文献購読、③文化・社会の多様性について自ら関心があるテーマの個別研究の3つを行い、日本や世界の多様な文化を学びながら、地域の外国人留学生との共同学習等を通して異文化理解の難しさや多文化社会の課題と解決策について自ら考える力を身につけ、より豊かな地域社会を作る上で文化・社会の多様性がいかなる役割を果たすのか、多様性のある社会を実現する上での課題は何か、どのように課題を乗り越えていくことができるかを、理論と実践の両面から考えます。

学びから得たこと・身につけたこと

この1年間のゼミ活動は、世界における多様な文化や価値観について理解を深める貴重な機会となりました。特に日本語学校では、「やさしい日本語」を用いながら、あいうえおカルタや季節ごとの日本の行事クイズなどの交流や活動も行い、楽しい時間となりました。そうした実践的な関わりを通して、日本人として生活しているだけでは気づきにくい文化的背景や価値観の相違について、具体的かつ実感を伴って学ぶことができました。

野田泰正

私はこの1年間、世界遺産・姫路城における国別観光客の注目点の違いを明らかにすることを目的に研究を行いました。TripAdvisorの口コミを国ごとに抽出し、観光客が何を魅力と感じ、どこに課題を見出しているのかを分析・比較しました。その結果、共通して高く評価される要素がある一方で、文化的背景や訪問目的の違いによって注目点や評価傾向に差が生じていることが明らかになりました。

林 奈々子

1人1プロジェクトリーダー制による産学公 NPO 連携 (臨床政策実践) ②

教員名 杉岡秀紀



学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、文献購読で専門の基礎を固めつつ、近隣の自治体・企業・NPO等と連携しながら、臨床政策実践(PBL)に取り組みました。

文献輪読は、今井照『地方自治講義』を輪読。

PBLは、①5大学インゼミ(岩手県立大・神戸大・京都産業大・新潟医療福祉大・本学)、②LINKtopos、③主権者教育(丹波市議会・福知山市議会)、④高校生みらい会議(京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会)、⑤綾部ちいたにプロジェクト(志賀郷ゴキゲン化計画)、⑥多世代交流プロジェクト(日星高校・城南中学校・和田中学校)、⑦政策コンペ(大学コンソーシアム京都「京都から発信する政策研究交流大会」京都府警察「ボリス&カレッジ」)などのプロジェクトを1人1プロジェクトリーダー制で進めました。

学びから得たこと・身につけたこと

様々なゼミ活動の中で、多くのきっかけと経験、そして自己理解を深めることができました。文献輪読に加えて、様々な地域の現場に出続ける機会があったため、文献知と現場知の両立をはかることができ、同時に1人1プロジェクトリーダー制から多様な姿勢を認めながらも主体性も発揮することができました。そのため、地域社会を「自分事化」することができ、本ゼミをきっかけに大きく成長することができたと確信しています。

鹿山雄生

前年に続き多世代交流や主権者教育などの様々なプロジェクトに参加させていただきました。活動を通して様々な方達と交流させていただきましたが今年は2回目となるプロジェクトもあり、関係性を深める事が重要なタイミングだったと思います。私は特に綾部プロジェクトの中で同じ人達と関わる事が多く、そこから広がった企画にも参加させていただきました。その縁を拾えるような自分になる事が成長に繋がったと感じました。

中林一葉

グループ・ダイナミックスの立場から災害と防災を考える

教員名 大門大朗



学修のねらい

本講義では、社会心理学(グループ・ダイナミックス)から理論的にアプローチし、地域社会に大きな影響を与える「災害」がもたらす様々な課題についてそれぞれの関心を深めました。前学期では、グループ・ダイナミックスの基礎的な理論を学習しながら、各自の関心に沿って、論文やフィールドワーク報告を行い、学びを深めました。後学期からは、福知山市内でのフィールドワークに加えて、各自の関心に沿って大規模災害の被災地(令和6年能登半島地震、熊本地震、東日本大震災)の被災地へ訪問しました。得られた知見について、各自のテーマに沿って、調査・情報収集、実践活動を行い、グループ・ダイナミックスの立場から研究論文を執筆することに挑戦しました。

学びから得たこと・身につけたこと

私は南海トラフ地震の際に大規模な津波被害が予想される高知県黒潮町でフィールドワークを行いました。200を超える避難経路の整備や津波避難タワーなど、被害者をゼロにするための取り組みを学びました。大規模な津波が想定されている町ですが、住民の方々が口をそろえて「普段は穏やかで安全な町です」と言っていたのが印象的でした。海の恵みと恐ろしさの二面性を理解し、備えることが大切だと気付きました。

長久保惣靖

今年度のゼミ活動を通して、福知山市でのBCP(事業継続計画)の一環であるファーストミッションボックスの作成に携わりました。この活動を通して、市の職員の方や社会福祉施設の方と打ち合わせを行い、災害時に現場で生じる課題や不安を聞くことで、資料や計画書を読むだけでは見えない現場視点の重要性を学びました。また、関係者と意見を共有しながら、実情を踏まえた防災対策を考える力を身につけました。

荒内謙伸

まちをもっと楽しく 面白く。コミュニティ をデザインしよう。

教員名 谷口知弘



学修のねらい

谷口ゼミでは、「コミュニティデザイン」を旗印に、多様な価値観を持った人々が機嫌よく暮らせる地域社会をつくるための理論や技法を開発する実践的研究を行っています。

3年生ゼミは、問題発見から解決に至る協働型デザインプロセスを企画・運営しプロジェクトマネジメントやファシリテーションの実践能力を身につける実践活動を行ないました。共通の関心で集うチームづくりから始め、次の2つプロジェクトを運営しました。

PJ1) 若者酒づくりプロジェクト～産学連携による若者のための日本酒の商品開発と高大連携による酒粕スイーツの開発
<協働：若宮酒造、綾部高等学校、京都工芸繊維大学>

PJ2) なぞときさんぼプロジェクト～大学生が主体となって地域に賑わいを生み出す試み<協働：ふくくるさんぼ、in enjoy >

これらの活動は「まちかどキャンパス吹風舎」を拠点に地域と関わり、大学と地域を往還して理論と実践の架橋を試みました。

学びから得たこと・身につけたこと

ゼミ活動では、実践を通じた学びの重要性を実感しました。特に、ハルカス学園祭での他大学との交流では、自分たちとは異なる視点や発想に触れ、企画を客観的に見直す力が身につきました。また、日本酒商品開発のコンセプトやネーミングを決める過程では、想いを言語化し、相手に伝わる形に落とし込む難しさを痛感しました。試行錯誤を重ねる中で、議論を深め、納得解を導く力やチームで協働する姿勢を身につけることができました。

久保田竜生（若者酒づくりプロジェクト）

ゼミ活動を通して、地域と協力しながら学ぶ楽しさを実感しました。商店街で行った謎解きイベントでは、本開催の前にプレ開催を行ったことで、参加者の動きや反応を事前に知ることができ、企画をより良い形に改善できた点が印象に残っています。実際の声をもとに改善する経験から、準備の大切さや柔軟に対応する姿勢を身につけることができました。この学びは、今後の活動にも活かしていきたいと思います。

谷口空良（なぞときさんぼプロジェクト）

卒業研究に向けた研究 構想力の養成と理論的 基盤の構築

教員名 張 明軍



学修のねらい

地域経営研究Ⅰ・Ⅱでは、卒業研究テーマの決定を主たる目的とし、研究基礎力の養成に重点を置いて取り組みました。具体的には、各自の関心領域に基づく先行研究の収集・レビュー、文献発表および討議を行い、研究課題の明確化を図りました。また、張研究室における過去の研究成果の振り返りや既存調査データの再整理・再分析にも取り組み、研究の継承性と発展可能性について検討しました。本演習は、理論的背景の理解、研究課題設定能力、データ活用力を高め、主体的に研究を構想できる力の育成を目的としています。

学びから得たこと・身につけたこと

文献レビューを通して、すでに明らかにされていることと、まだ明らかでないことを区別できるようになりました。研究は自分の興味だけでなく、これまでの先行研究を踏まえて進める必要があると学びました。また、卒論テーマでは、何を明らかにしたいのかという問いを明確にし、対象や方法を具体化する重要性に気づきました。今後は根拠に基づいて論じていきたいと考えています。

浦田彩花

2025年度地域経営研究Ⅰ・Ⅱを通じて、文献レビューと卒業論文テーマの検討に取り組みました。質の高い文献の見分け方や効率的な要約方法を学び、先行研究の重要性を実感しました。また、研究対象を限定することで新規性を高められることを理解し、多くの文献を読む中で問題意識が明確になり、研究へと発展する過程を学びました。

柳瀬大勇

交流観光等による 多自然圏（非大都市圏） の地域活性化

教員名 中尾誠二



学修のねらい

三重県紀北町での「宿泊を伴ったフィールドワーク」に加え、各自が設定した研究を進めることで進路への動機付け深化を狙いました。研究テーマは以下の通りです。

- ・新垣禾乃：沖縄県における観光施設の立地偏在と分散型観光の可能性～東海岸地域における民泊を中心とした地域観光の考察～
- ・石原小友音：地域を巻き込む婚活イベントが生む新しい関係人口～三重県紀北町「釣りコン」を中心とした関係人口創出の研究～
- ・是枝伊吹：地域における混住化の新たな考え方～地域イベントからみる住民の意識の差～
- ・竹内沙也香：耕作放棄地を活用した六次産業化事業に関する研究～三府県の先進事例分析と比較から考える鳥取県農業を対象としたモデルデザインの提案～
- ・中村紗希：学生主催のマルシェが地域に与える影響～京都府福知山市と大阪府寝屋川市の事例を比較して～
- ・保志若柚葉：地域資源を活用した地域協働活動～子どもたちの郷土愛の育成に着目して～

学びから得たこと・身につけたこと

今年度は昨年度とは少し違い、宿泊した後の関係構築までできたと感じています。但東町や上六人部では昨年度に関わった方々とイベントの企画運営を一緒に行うことができました。今までは宿泊場所でオーナーやゲストさんからお話を聞く聞き取り調査が基本でしたが、今年度は交流観光における次のフェーズに進めた気がしました。また他学年との活動も多く、ゼミ内での交流も深めることができましたと感じています。

是枝伊吹

今年度は三重県と兵庫県を調査で訪問しました。特に三重では、自治体やマルシェ、民泊の運営、森農人のような地域活動団体の方まで幅広い立場で農山村地域を支える人と出会いました。それぞれが考える「紀北」の見え方やアプローチは違いますが、紀北への愛がエネルギーとなっている点につながりを感じ、団結して地域を盛り上げるパイオニアたちの姿を学びました。「地域」における「人」の重要性と面白さを知った1年でした。

竹内沙也香

教育(特に学校経営)における 多様なテーマに対して、独自の視点で捉え研究する

教員名 福島真治



学修のねらい

学校経営を主軸としながら、「地域との連携」・「チームとしての学校」にまで射程を広げ、その概要や特質・直面している課題などを学修した上で、実際に自身の関心に合わせたテーマを設定し、文献／実地調査を行います。そして、その結果を基に、実際に教育を軸に地域社会を活性化していくための条件を探ることが、このゼミの目的です。

具体的な取り組みは、以下の通りです。

- ・論文執筆に必要なアカデミックスキルに関する学修を行いつつ、学生自身のテーマ（「中学校における生成 AI の利活用」「学校教育における食育」「高等教育機会の地域間格差」「教科書における戦争記述」「在留外国人に対する教育施策の自治体間比較」「教育現場への ICT 導入」「大学生の主体的活動の教育効果」「特別支援教育の国際比較」）に関する先行研究の整理・フィールド調査などを実施し、その成果をレポート・ポスターにまとめました。

学びから得たこと・身につけたこと

本研究では「中学教育における生成 AI へのプロンプトと学習活動の関連」について検討しています。その学びを通して、主に2つの力を身につけました。1つ目は、目的に応じて情報源を選択し、試行錯誤から必要な情報へと近づくアプローチの仕方です。2つ目は、学習の中で生じた疑問を起点に、別の疑問と結び付けながら整理し、筋道を立てて考える論理的な思考力です。これらは、学びを深める上で重要な基盤であると考えています。

尾崎 航

本研究では、「大学生の主体的な活動における教育的影響」を検討しています。その過程で、文献や事例に触れながら多様な視点から問いを立て、社会課題を自分自身の問題として捉える姿勢が培われました。また、実際の経験と資料を結びつけて考える中で、学びを整理し、考えを深める力も養われました。これらの力を、今後の研究や実践において活かしていきます。

廣本琉偉

医療機関データの横断的分析を可能とする統合病院マスタの完成と英語文献から学ぶ世界の医療情報

教員名 星 雅文



学修のねらい

当ゼミの学生は、医療機関データの横断的分析を可能とする統合病院マスタの作成を、昨年度卒業した先輩から引き継ぎました。先輩らによる8千数十件の統合病院マスタの種をさらに精度を高め、一般公開できるレベルに昇華させることを目標に1年間地道にデータ収集と統合・分析に取り組みました。また医療情報分野の海外動向を知るため、学生が個々に英語文献を収集し、内容を報告する抄読会を開催しました。将来の卒業研究の文献収集の際に必要な技術と経験を身につけることが目的でした。なお、当ゼミでは例年11月に名桜大学との研究交流会を実施しており、今回は名桜大学の3年生による混合の4グループによるワークを行いました。テーマは「医療情報システムの病院導入における失敗例」を元にした問題点の洗い出しと対応策の提案でした。他学との接点が少ない本学の学生にとって、同じ目標を持つ学生との真剣な議論は新鮮な経験をもたらしたと考えます。

学びから得たこと・身につけたこと

沖縄研修の名桜大学生とのグループワークでは、初めて出会う学生の方々と一つの課題について考え、発表しました。この経験からグループワークの流れなどを学ぶことができました。また、公開されている様々なデータを接続するための病院マスタの作成を先輩から引き継ぎました。そこで何万件という大量データをAccessによって処理する技術を身につけることや、病院が統廃合で年々変化している実態を知ることができました。

学生A（匿名希望）

3年ゼミでは、まず英語文献の精読方法や文献探索の技術を身につけることができました。私が選んだ文献はアメリカにおける病院の統廃合と医療の質の関係を示したものでしたが、同じ研究手法が日本の病院でも適用できる可能性を感じました。先輩から引き継いだ「病院統廃合マスタの作成」では、Accessによる大量データ処理を経験でき、さらに病院の追跡調査で、病院により情報公開の度合いに違いがある点が厄介でした。

学生B（匿名希望）

2025年度地域協働型教育研究報告会を実施しました

2026年2月14日（土）、地域経営学部による2025年度地域協働型教育研究報告会を本学で実施し、地域が抱える課題について、フィールドワークなどを通じて調査・分析・考察した成果を学生が発表しました。

報告会は、井上直樹地域経営学部長の挨拶で始まり、午前中は1年生が福知山市をフィールドとして取り組んだ、観光資源の魅力発信、地域産業の活性化、公民館を活用した多世代交流、地域福祉の現状を踏まえた課題解決に向けた検討など、1年間の学びの成果を発表しました。

福知山市三和地域を主な活動拠点とした学生グループの発表では、地域の発展を一次産業の発展と位置づけ、三和町の農業などに焦点を当てて課題を抽出し、大きな課題である人手不足への対策を検討しました。若者をターゲットとした「共感人口」を増やす施策を提言し、まずは地域の認知を広げる必要性を訴えました。

また、報告会に来場された協働先の地域の方々からは、学生の取り組みに対し、温かいコメントが寄せられました。

午後からは、各ゼミがそれぞれ割り当てられた教室に分かれ、2～4年生による研究発表が行われました。2・3年生は主にポスターセッション形式でゼミ活動の内容を紹介し、来場した学生や教員、地域の方々に向けて研究内容や活動成果を説明しました。発表を通じて活発な質疑応答が行われ、学年を越えた交流の場となりました。

4年生は卒業研究の成果発表を行い、ポスター展示による発表に加え、ゼミによっては登壇形式で研究内容を報告するなど、各ゼミの特徴を生かした多様なスタイルで発表が実施されました。発表を行った学生は、来場者からの質問に応じながら、自身の研究内容への理解を深めていました。

4年生による発表では、卒業研究の成果として、京都府北部地域を対象にソーシャル企業認証制度（S認証）の活用実態と課題について調査・分析した研究が紹介されました。本研究では、企業・金融機関・大学・行政へのヒアリングやアンケート調査を通じて制度の現状を多角的に分析し、認知度の向上や他制度との差別化、人材市場との接続といった課題を整理するとともに、地域に根差した制度運用に向けた政策提言が示されるなど、地域課題の解決を見据えた実践的かつ専門性の高い発表が行われました。

4年生にとっては、これまで積み重ねてきた学びを社会へとつなげる集大成の機会となりました。

本学では今後も、地域を学びのフィールドとした地域協働型教育を通じて、地域とともに課題解決に取り組む実践的な学びを推進してまいります。



出典：本学 Web サイトより

卒業研究 I・II テーマ一覧

ゼミ担当教員	卒業研究テーマ	学生氏名
井上直樹	日本の上水道事業における持続可能な経営手法の研究	宮崎夢香
大谷 杏	中長期的な観点から見た郷土学習による地域人口の維持について	武田知之
	三重県における外国人住民への言語支援の現状と課題	梅田衣鶴
	鉄道と歌劇によるまちづくり — 兵庫県宝塚市の事例から —	加納優衣
	配置業販売を通じた高齢者の見守りとしての可能性 — 配置業の現状と課題から —	中川朋香
	丹後地域の食文化の傾向	匿名
	大学生におけるリア友・ネット友の心理的役割	村田唯衣
岡本悦司	二次元コンテンツと地域社会の相互作用 — 『名探偵コナン』と『THE IDOL M@STER』シリーズの事例から見る観光振興の可能性 —	新熊玲美
	DWH を利用した東京都の看護師一人当たりの病床数の比較	匿名
	dpc と病床機能報告の統合データ作成と活用	匿名
	DWH の作成とそれを用いた看護師 1 人当たりの病床数の分析	匿名
	DWH の作成と長野県における医療実態	匿名
	DWH の作成および二次医療圏ごとにみた病床機能別看護師配置の実態と地域偏在の分析	匿名
	複数の医療関連データを用いたデータの加工方法の検討	匿名
DWH を利用した宮城県の看護師一人当たりの病床数の比較	匿名	
加藤好雄	ERP 市場における ERP 導入停滞の構造分析 — 制度的制約とベンダーロックインの観点から —	匿名
	正社員における主観的職場評価と転職・離職意向の関係 — 高業績層における裁量の効果差に着目して —	匿名
神谷達夫	GNSS ロガーによる観光者回遊行動の可視化と活用可能性	坂野善一
	福知山イル未来とにおける地域活性化イベントの実践的研究 — 夜間観光資源の高度化と地域ブランド形成を目指して —	稲啓汰
	地域イベントにおける来訪者行動の可視化に関する研究 — 少数 GPS ログを用いた移動・滞留抽出手法の検討 —	甫立円香
	GPS ロガーと属性調査を用いた観光者行動分析 — 夕日ヶ浦キャンドルナイトを事例に —	矢野玄樹
亀井省吾	規格外万願寺とうがらし活用による社会的エンゲージメントの形成 — ソーシャルビジネス研究による検証 —	磯崎泰智
	クラウドファンディングにおける「応援」と「共感」の価値創造 — 大学生の実践事例を通じた考察 —	太田真鈴
	地域産業活性化における段階的資金調達モデルの形成 — 地方銀行とクラウドファンディングの連携に着目して —	甲斐裕基
	地方大学生における主観的満足感と成長志向の両立 — 自己決定理論を手がかりとして —	工藤 愛
	ユニクロにおける経営意思決定の分析 — プロスペクト理論による楽観・悲観スタンスのメカニズム解明 —	高島駿斗
	地域メディアによる社会的相互作用に関する実証研究 — 学生記者のエンパワーメント記事による地域価値共創の可能性 —	森中公太
	音声メディアの普及と音声思考 — 音声メディアを通じた自己効力感と自己変容プロセスについて —	渡部大陸
	パーパスが促す認知的多様性と地域企業の持続可能性 — 福知山エリアの企業研究を通じて —	菅谷快晴
川島典子	生活しやすい避難所を目指して — 石川県七尾市中島町の事例を通して —	石田浩祐
	京都府北部におけるビジネスケアラーの実態と課題 — アンケート調査を通して —	大槻真白
	性の多様性に関する早期教育の有効性 — 教育がもたらす児童への影響と妥当性の検証 —	小澤千星
	社会福祉における NPO 法人の可能性	片野 拓
	障害者雇用の現状と地域支援の課題に関する実証的研究 — マ・ルートの事例を通して —	坪内烈士
	地域包括ケアシステムにおける都市部と農村部の比較 — 横浜市と福知山市夜久野町を通じて —	本木天満
木村昭興	持続可能な地域運営組織の形成に向けた示唆 — 住民主体のまちづくりを目指して —	花谷 歩
小山元孝	電子地域通貨による地域活性化の実態と課題 — 『あさご Pay』を事例とした消費促進型地域通貨の運用実態と限界 —	匿名
	新卒社員の職場におけるストレスの考察 — ストレス反応と離職意識に対するコーピングの影響の検証 —	伊地知奈央
	万国博覧会開催に伴うレガシー — 物理的レガシーの観点による開催都市への影響 —	寒竹尚也
	喫煙者の禁煙意思に関する研究 — たばこの種類、性別、年齢階級別の比較と 10 年間の推移分析 —	匿名
	ニュータウンと既存集落をつなぐ子どもの居場所の役割 — 長尾児童館の実践から —	竹内 萌
	大阪府の南北差	山口 弦
佐藤 充	ミュージックツーリズムにおける関係人口創出の可能性	匿名
	観光入込客の属性が事業系ごみ排出量に与える影響 — 京都市市町村パネルデータによる分析 —	安東優人
	持続可能な企業の経営 — LEAP アプローチを用いた企業の研究 —	匿名
	宿泊業従業員の職務満足度と観光地域づくりへの参画意向 — 職務要因と地域要因の関係性に着目して —	今中志保
	中学部活動地域展開における担い手の確保に関する研究 — 福知山市の取り組みを通じて —	小林夏希
	夕日ヶ浦における SNS 運用活動の成果と今後の活動に向けて	小松さくら
	地方における祭礼の維持・存続に関する研究 — 石川県小松市「お旅まつり」を事例として —	関岡 慎
	地域主導型音楽イベントの現状と課題 — MAIZURU PLAY BACK FES.2025 を事例に —	恒吉心桜

ゼミ担当教員	卒業研究テーマ	学生氏名
渋谷節子	器と食品の色の関係性 — 文化と色彩の視点からの考察 —	大山萌花
	メディアに描かれる無意識の偏見とその克服：アニメーション映画『ズートピア』を題材として	畑 真未
	沖縄の民間宗教 — ユタと地域社会のつながり —	宮本郁美
	地域社会で「生きる」文化としての民謡 — 富山県の事例から —	匿名
	ミャンマー内戦から見る宗教戦争の複雑さ — ロヒンギャ問題の考察 —	匿名
	サンタクロースの社会的意義 — 人道主義の視点から —	中山花穂梨
	日本の食事マナーと美意識：マナーに見る他者と自己との関係性	西村千陽
杉岡秀紀	「保育教諭」の働きがい高めるための「他者」との関係性についての研究 — 静岡県静岡市の私立保育施設の取組みと行政支援を事例に —	小林航也
	地域における伝統文化再生に関する研究 — 京都府福知山市の藍染文化を事例に —	阿川ねね
	中小企業における認証制度活用の実態調査と今後の在り方に関する一考察 — 京都府北部地域におけるソーシャル企業認証制度（S認証）を事例として —	後藤結衣
	行政・まちの保健室・地域づくり組織の連携・協働に関する研究 — 三重県名張市における地域支援体制の実態と課題 —	清水彩華
	旅先納税による観光消費の地域内循環に関する研究 — 海の京都コインを事例に —	高橋和樹
	任期終了後における地域おこし協力隊の地域への関わり方についての研究 — 京丹後市を事例として —	田中敬護
	若者の「主権者教育」と「自分ごと化」に関する研究 — 主権者教育からシティズンシップ教育へ —	山田和香
大門大朗	水害常襲地における防災ツーリズムの展開 — 他地域の事例を踏まえた福知山市大江町での実践 —	佐々木乃愛
	個別避難計画の訓練・運用を可能とする要因の探求 — 福知山市の先進的な取り組みを事例として —	下屋好亮
	令和6年能登半島地震から見る災害ボランティアの課題とコンヴィヴィアリティによる回復	匿名
谷口知弘	家庭の防災意識向上を目指した子どもへの防災教育の実践的研究 — 防災教育の歴史の変遷と先行研究から考える防災遊びの教育的意義と課題の考察 —	木下大生
	循環型社会の実現に向けた地域交流の可能性 — 無人型シェアリングが助け合い意識に与える影響 —	栗原乃愛
	家庭の防災意識向上を目指した子どもへの防災教育の実践的研究 — 子どもに対するデジタルツールを活用した新たな防災教育への提案 —	田藤愛梨
	循環型社会の実現に向けた地域交流の可能性 ～ 透明傘における地域参加型デザインの介入が人の使用行動に与える影響 ～	疋田雄誠
	大学生が携わる絵本を架け橋に心の豊かさを育むための地域交流とボランティアの活性化 — 洲本市における絵本を用いた交流によるコミュニティ創出の提案 — 福知山市での実践をヒントに —	匿名
	家庭の防災意識向上を目指した子どもへの防災教育の実践的研究 — 防災と子どもの「大切なもの」を組み合わせた2way防災教育 —	山崎楓真
張明軍	家庭の防災意識向上を目指した子どもへの防災教育の実践的研究 — 新たな視点から考える防災とその効果 —	吉森萌生
	大学生が携わる絵本を架け橋に心の豊かさを育むための地域交流とボランティアの活性化 — 福知山市での絵本活動の現状と活発に拡大した要因について —	匿名
	観光客支払施設導入をめぐる住民意識の構造形成 — 京都府伊根湾における入域料導入仮定を例として	遠藤優斗
中尾誠二	人口減少を見据えた地域祭礼の住民参画意識の規定要因 ～ 七尾市の青柏祭を事例として ～	谷内直輝
	農村地域における社会参加意識の構造的要因	由利虎太郎
	地域連携 DMO の効率的な収益事業実施に向けた考察 ～ 森の京都エリアにおける教育民泊受入増を中心に ～	友塚絢人
	CCRC の社会的効果と可能性に関する考察 ～ 地域の内発的発展に向けて ～	有賀溪粹
	空き家活用における行政と地域社会のコーディネート機能に関する研究 ～ 埼玉県秩父市・日高市および京都府福知山市の事例から ～	五十嵐玲奈
	COVID-19 期を経て見えた農泊の在り方に関する研究 ～ 京都府綾部市・兵庫県豊岡市を事例に ～	小島知也
福嶋真治	人口減少社会における学校再編と地域社会 ～ 兵庫県豊岡市の小中一貫校（竹野学園）と小規模特認校（八代小学校）を事例に ～	田中大成
	災害復興期の行政サービス維持に関する研究 ～ 市町村合併をした3市の比較から ～	安井勇渡
	中山間における地域支援人材のあり方に関する考察 ～ 新潟県上越市の事例分析を中心に ～	渡部夢生
	中学校における SC と教員の効果的な連携に関する考察 — 連携支援ツールの活用可能性に焦点を当てて —	酒井尚人
	日本の学校教育におけるウェルビーイングの理念と実践の乖離 — 教育政策と学校文化の分析を通して —	佐藤千奈津
	フリースクールの制度的位置づけと社会的認知に関する研究 — 持続可能な教育機関としての可能性を探る —	高橋壮太郎
	中学校教員の働き方は持続可能か — 日本・韓国・フィンランドおよび民間企業との比較を通して —	堀田孝太郎
	初等・中等教育段階におけるシティズンシップ教育の役割に関する一考察 — 政治的関心の向上をねらいとした実践事例の検討を通じて —	前田紘玖
	生成 AI の特別支援教育における活用可能性 — 教員の役割と支援の観点から —	増原州真
	中学校キャリア教育におけるキャリア・パスポートの活用現状と構造的課題 — 制度的理念と運用実態のギャップに着目して —	松本 蘭
星雅丈	日本の初等中等教育における LGBTQ + 教育の制度的位置づけとその課題 — 教育課程に関する国際比較を軸に —	松山友子
	地方圏域における産科医療の縮小に対する解決策の検討 — 但馬医療圏を事例として —	匿名
	特別豪雪地帯における医療提供体制の現状から遠隔医療適用の可能性を探る	匿名
	愛玩動物関連医療費の現状と行政コスト削減の観点からみた限定的公的支援の可能性	匿名
	近畿地方における病院への電子カルテ導入の可能性を探る — 施設基準届出状況に基づく情報化推進度の評価と分析から —	匿名
	北近畿地域における医療アクセシビリティの定量的評価 — GIS を用いた道路ネットワーク分析と人口カバー率の算出 —	匿名
	健康リテラシーと食習慣・運動習慣の関連を探る — 大学生に対する質問紙調査の結果から —	匿名
	岡山県における医療専門職を育成する各種学校・大学等の地域偏在に関する研究	匿名
	南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域の病院は発災時に機能するか？ — 四国地方における病院の BCP 策定状況に基づく検討 —	匿名
病院のホームページにおける情報掲載のあり方に関する研究	匿名	

地域キャリア実習



プログラムについて

本学では、大学での学びと社会での経験を結び付け、学生の学びの深化や学習意欲の喚起、自己の職業適性や将来設計について考える機会を学生に提供することを目的に、教育課程に「地域キャリア実習」というプログラムを位置づけております。この「地域キャリア実習」では、広く一般に募集を行っている大企業等のインターンシップだけでなく、北近畿を中心とした地域の事業所にて就業体験ができる機会を設定し、学生からは普段目につきにくい企業の情報に触れる機会を設け、将来設計について考えるための多種多様な材料を提供したいという意図も含まれています。

実習までのスケジュール

- | | |
|---------|--|
| 4月～5月 | 協力企業への呼び掛け |
| 6月 | 実習希望学生の募集及び選抜 |
| 7月上旬 | 学生の実習先決定、事前研修 |
| 7月中～下旬 | 実習先事前訪問（打ち合わせ） |
| 8月～9月頃 | 実習（8月中旬～9月末頃で5日間～10日間）
※企業によっては10月に実施も有 |
| 9月～10月頃 | 報告書の作成 |
| 12月 | 学内報告会の実施 |

綾部市役所・社会教育課(綾部市天文館パオ)

地域経営学部地域経営学科 松本悠誠 / 地域経営学部地域経営学科 藤原礼乃

■はじめに

本稿では、綾部市役所・社会教育課(綾部市天文館パオ)にて行われた実習について、その内容とそこで得た学びについて報告します。

私は近畿北部の市役所に就職したいと考えているという点と、綾部市役所が掲げる「一人ひとりの幸せをみんなで紡いで実現できるまち…綾部」というビジョンに共感し、これを掲げる綾部市役所が地域においてどのような役割をしているか、地域との関わり方や地域のために働くことの意義を学べると考え志望しました。(松本)

大学からも近く、身近な存在というのがそのきっかけでした。また、「一人ひとりの幸せをみんなで紡いで実現できるまち…綾部」という将来像にも共感し、綾部市役所での実習に参加することで、市役所職員の業務の一部や、地域のために働くということがどのようなものであるか学べるのではないかと考え志望しました。(藤原)

なお、綾部市役所・社会教育課(綾部市天文館パオ)の概要については以下の通りです。

■実習先概要

<企業名> 綾部市役所・社会教育課(綾部市天文館パオ)

<所在地> 京都府綾部市里町久田 21 番地の 8

<主要な事業内容>

天体観測、館内の案内、展示物の説明、工作教室の指導など

<会社 URL > <https://www.city.ayabe.lg.jp/>



■実習の概要

実習は、8月19日から8月23日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

【1日目】天文館の見学と説明、業務内容の説明、工作の試作、綾部市役所庁舎の見学

【2日目】子供たちへの工作指導、工作の修理・試作、館内案内

【3日目】子供たちへの工作指導、工作の修理・試作、館内案内

【4日目】子供たちへの工作指導、工作の修理・試作、館内案内

【5日目】子供たちへの工作指導、工作の修理・試作、館内案内

■実習を終えての学び

今回の綾部市役所・社会教育課(綾部市天文館パオ)のインターンシップで、私は主な仕事として、子供たちへの工作指導や館内案内など、より地域住民と密接に関わる仕事を行いました。その中で子供たちに工作指導を行うとき、どのような言葉遣いで話すか、どこまで手伝うのか、親御さんとの交流の仕方など、私にとっては難しいことが多かったです。しかし、私たちの実習の担当をしてくださった方は、子供たちとの会話や保護者との会話、技術的な指導の仕方など、子供たちとの触れ合い方や周りを見る力などが洗練されているなど感じました。それを見て、私は子供や保護者との交流を通じて、地域とつながるためには、同じ目線で物事をとらえ、地域の方との信頼関係を築き、地域に必要とされることが重要であると学びました。今回の実習に参加したことで、地域との向き合い方と信頼関係の構築の大切さを学び、市役所職員として働いていくためには、地域住民から必要とされる存在になり、地域住民との信頼関係構築を大切にしていこうと考えました。また、これはこれからの就職活動でも重要になってくるもので、これから様々な人たちと出会っていく中で、信頼関係の構築に役立てることができると考えました。

そしてこれから自分の進路を考えていくうえで、自分が本当にその街で地域のために働きたいのか、どんなことがしたいのかを改めて考えることができたし、実際の現場で仕事の雰囲気や内容を少しでも知れたことはとても大きな経験になると思います。そしてこれから就職活動が本格化していく中で、自分の進路にしっかり向き合えるように今回の経験を生かして、自分の進路選択をより良いものにできるようにしていきたいです。(松本)

綾部市役所社会教育課のインターンという点で、市役所の見学や本庁舎を中心に市役所職員の業務について学ぶものと思っていましたが、実際の実習は想像と違っていました。例えば初日には、これから来館者と作る予定である、からくり貯金箱と家の貯金箱、2日目は歩くからくりを作成したり、3日目は輪ゴム鉄砲と飛び出すおもちゃを作ったり、工作の手伝いをしたりと、綾部市天文館パオを1つ1つ見るというものでした。実習を体験することで、工作を考えて、難しいところがあればどうやればうまくできるかを用意する、事前の準備がとても大切であることを学びました。工作を作り出して、教えて、振り返ることができました。来館者との触れあいを通じて、地域のために働くという業務が指す内容を肌で感じることができ、地域社会に求められる施設のあり方を学びました。実習の中で特に印象に残っている点としては、触ってみる展示物をできるだけ低い位置に置いたり、作品について手が小さいから幅を短くして遊びやすいように工夫したり、相手を想像して合わせて接して、相手に応じた声掛けをする様子を目にしたことです。地域の方々との信頼関係を積み上げていくことが、地域密着した施設では重要であるのだと感じました。

この実習に参加することで、来館者側では知ることのできなかった施設のあり方を実際に体験することができ、狭かった視野が今までよりも広がったと感じます。こうして新たに得た知見を活かして、今後の就職活動に取り組んでいければと思います。(藤原)

■はじめに

本稿では、株式会社ヨネダにて行われた実習について、その内容と、そこで得た学びについて報告します。

株式会社ヨネダを実習先に選んだのは、地域キャリア実習の数ある実習先の中から「リフォーム」という言葉に興味があったからです。昔から木の家や家に関することが好きで、それが選んだきっかけかもしれません。実際にリフォームの現場を体

験し、仕事のやりがいや楽しさを自分の目で確かめてみたいと感じました。また学生のうちに社会人としての礼儀作法や働く姿勢が自分にとって必要だと感じ、インターンシップに参加して学ぼうと考え、志望しました。

なお、株式会社ヨネダの企業概要については以下の通りです。

■実習先概要

- < 企業名 > 株式会社ヨネダ
- < 所在地 > 京都府福知山市字堀小字道場 2433 番地
- < 主要な事業内容 > 土木・一般建築・住宅・リフォーム・マンション・不動産仲介
- < 会社 URL > <https://www.yonedagumi.com/company/profile/>

■実習の概要

実習は、9月1日から9月5日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

- 【1日目】本社にて会社概要の説明と作業服の貸与、現地調査に同行、営業同行
- 【2日目】営業同行、現場同行
- 【3日目】営業同行、現場同行、工場の掃除
- 【4日目】会社概要の説明、リフォーム設計、パース作成
- 【5日目】リフォーム福知山店内の案内、現場同行、営業同行

■実習を終えての学び

今回のインターンシップでは、5日間のなかで4日営業・現場の同行をさせて頂きました。その中で、営業の方はリフォームするお客様のお宅の現地調査から施工まで関わり続けることを学びました。他の企業では営業の方は現地調査やヒアリングを行なっても、リフォームの施工に関しては職人さんに任せることが多いです。しかし株式会社ヨネダでは施工中も大家さんや職人とコミュニケーションを取りながら“現場監督”としての役割も持っていることを学びました。具体的には、施工の日程決めや職人さんの人材配置を一人で先行工程の最終決定を下します。また大家さんに施工工程を伝え、施工中もコミュニケーションを取り続ける、など幅広い業務を行っていることを実感しました。こうした現地調査から大家さんとコミュニケーションを取り続けていることで、大家さんと営業の方が親密になり株式会社ヨネダにおけるリピーターが増えるのだなと感じました。

実習中、印象に残ったことは事務所の明るい雰囲気です。営

業・現場に行く仕事モードの時と違って明るく話されていて、お昼では社員さんたちが和やかな雰囲気でお話されていることが印象的でした。社員さんたちは私に営業中でも休憩中でもたくさん話しかけてくださり、社員さんの優しさに触れました。緊張しているときは笑かして緊張をほぐしてくださり、体調や帰り道を心配してくださるなど社員さんのおかげで本当に充実したインターンを過ごせました。

この実習に参加することで、自分の将来について前向きに考えるようになりました。今までは就職活動に関してあまりしてこなかったのですが、このインターンシップは私にとってかけがえのない経験となりました。温かい人達に触れ、もっとたくさんの人と話し、新しい学びを吸収したいと考えるようになりました。また仕事のこと、人として大事なこと、両方で新しい学びがありました。この経験を機に、新しい場に行き、たくさんの人と話し、学び続けたいと思います。



■はじめに

本稿では、日東精工株式会社にて行われた実習について、その内容と、そこで得た学びについて報告します。

日東精工株式会社を実習先を選んだのは、「締結技術を起点としたモノづくりの進化」に強く惹かれたからです。日東精工株式会社はねじから自動組立機械、検査機器、さらには医療分

野にまで事業領域を広げ、「見えない部分で社会を支える技術力」と「グローバル視点の経営」が特徴だと感じました。

なお、日東精工株式会社の企業概要については以下の通りです。

■実習先概要

- <企業名> 日東精工株式会社
- <所在地> 京都府綾部市井倉町梅ヶ畑 20 番地
- <主要な事業内容> ファスナー事業・産機事業・制御事業・メディカル事業
- <会社 URL > <https://www.nittoseiko.co.jp/>

■実習の概要

実習は、9月1日から9月5日の計5日間の日程で実施されました。各日における実習の内容は主に以下の通りです。

- 【1日目】企業説明、安全講習、採用資料作成、採用ノベルティ案の資料作成
- 【2日目】採用資料作成、採用ノベルティ案の資料作成、ねじ締めロボットの生産工場・ファスナー工場見学
- 【3日目】採用資料作成、採用ノベルティ案の資料作成、採用パンフレットの改善案の提示
- 【4日目】採用資料作成、採用ノベルティ案の資料作成、採用パンフレットの改善案の提示
- 【5日目】採用資料・採用ノベルティ案の資料の発表、フィードバック

■実習を終えての学び

日東精工株式会社での人事総務部人事課でのインターンシップ実習を終えて、特に学びになったことは「採用活動を支える裏方の工夫や視点の大切さ」です。実習前は、人事業務といえば面接対応や採用広報といった表に出る活動を中心に持っているイメージが強くありました。しかし、実際の実習では、採用資料の作成や採用ノベルティ案の提示、パンフレット改善案の検討、さらにはそれらの発表など、学生に向けて分かりやすく情報を届けるための工夫を考えることが中心でした。特に印象に残ったのは「採用資料の作成」です。どこまで情報を盛り込み、どこで余白を持たせるかを考えることは予想以上に難しく、単に情報量を増やすことが良いのではなく、相手の視点に立って「何が一番知りたい情報なのか」を見極める必要があると感じました。また、実際に工場を見学した際、ねじ締

めロボット工場では従業員の人数が少なくても効率的に生産が進んでいる姿を目にし、会社の強みや特色を現場から実感することができました。

最終日の発表では、同じ就活生に説明する気持ちで資料をまとめて発表しましたが、「自分が就活生だったら何を知りたいか」という視点を持ち続けることの重要性を改めて感じました。この経験を通じて、人事の仕事は単に人を採用することではなく、会社の魅力をいかに分かりやすく伝え、相手との信頼を築いていくことだと理解することができました。

今回の実習によって、人事という仕事の奥深さを知ると同時に、自分の視野も広がったと感じます。今後の就職活動においても、表面的な理解にとどまらず、自分が納得できるまで調べ、相手の立場に立って考える姿勢を大切にしていきたいです。



診療情報管理士とは

病院で日々発生する患者さんの診療に関わる重要な**情報の番人**であり、医師や看護師が作成した診療記録をチェックする**お目付け役**であり、病院に蓄積する情報を分析し、診療や病院経営に必要な知見を提供する院内の**コンサルタント**です。

● 実習病院を決める ●

実習でお世話になる病院は、以下の流れで決まります。

- ① 実習を受けたい病院の候補を探す。
(学生) ※ 3年次 3～4月
- ② 病院に依頼状(予告)を送付する。
(大学) ※ 3年次 4～5月
- ③ 病院に連絡を入れ、実習の受け入れを依頼する。
(学生) ※ 3年次 4～5月
- ④ 実習病院が決まる。 ※ 3年次 6～7月
 依頼状、協定書 自己紹介書の送付・持参
- ⑤ 実習病院の事前調査・研究を行う。
(学生) ※ 3年次 6～7月
- ⑥ 実習病院に事前挨拶に行く。
(学生・大学) ※ 3年次 8～9月

病院さんにも様々なご都合があり、希望が必ず叶うとは限りません。その場合は、先生と相談しつつ実習病院を再検討することになります。

病院実習を行う理由①

診療情報管理士認定試験の受験資格を取得するには・・・

3年次前期までに、以下の全科目の単位を修得し、さらに、**病院実習**に赴く必要があります。

< 1年次 >

- ・解剖生理学
- ・医学英語
- ・医療概論
- ・感染症・呼吸器学
- ・血液内分泌・腫瘍学

< 2年次 >

- ・精神神経・循環器学
- ・消化器・尿生殖器学
- ・医療管理論Ⅰ
- ・医療情報学
- ・診療情報管理論
- ・周産期・先天異常学
- ・皮膚筋骨格・中毒学
- ・医療管理論Ⅱ
- ・医療統計学
- ・診療情報分類法総論

< 3年次 >

- ・医療管理論Ⅲ
- ・診療情報分類法演習
- ・病院実習

病院実習を行う理由②

病院実習は、認定試験の受験資格を取得するためだけに行うものではありません。

普段、絶対に入ることのできない病院事務職や診療情報管理士さんが働く空間にお邪魔して、普段の業務の流れ、他職種とのかかわり、会議の様子などを見ることができます。病院によっては、情報の入力やデータの分析などを経験できます。

それまで机上で学んだことが医療現場でどのように生きるかの**実感**が伴うことにより、勉強や就職活動に向けてモチベーションを高めるよいきっかけになります。

学生は何を感じたか

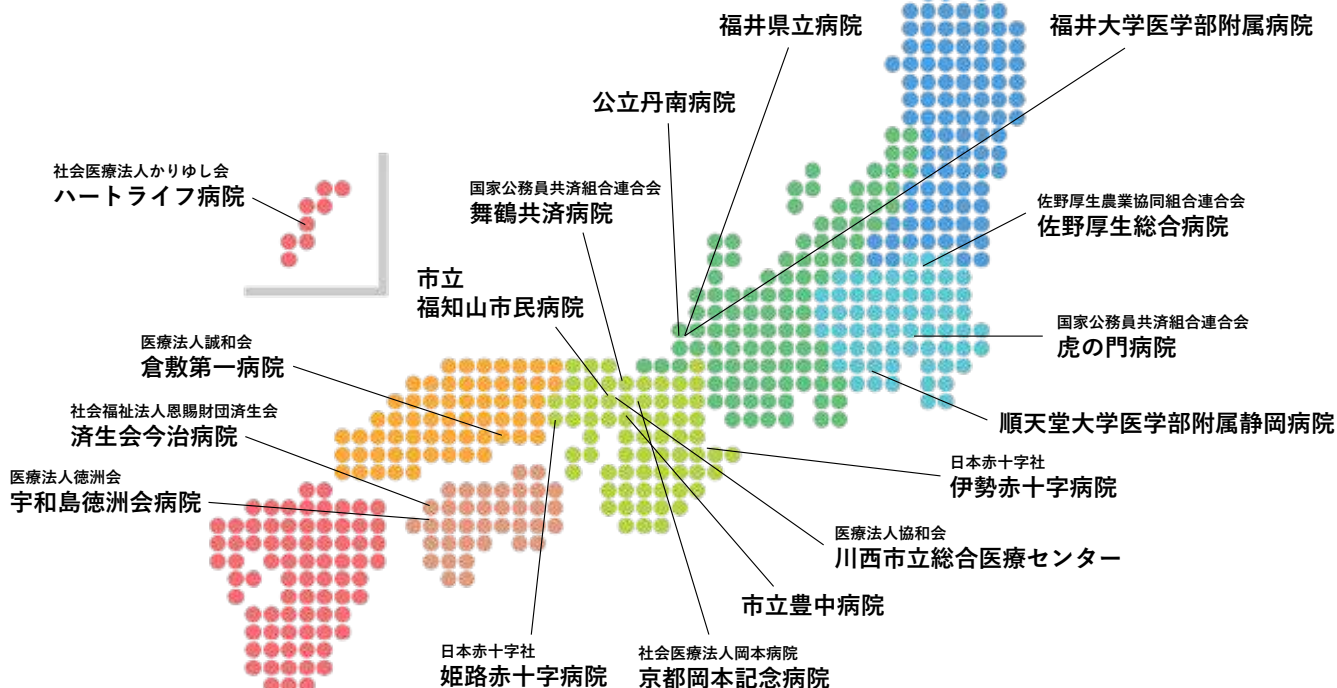
- 退院サマリーを複数閲覧する機会がありました。医師によってそれぞれ書かれる文量やその質の違いを知りました。そして内容の妥当性や第三者から見た理解のしやすさなど、カルテ等の診療情報を質と量を保って保存しそれを共有しチーム医療につなげていくことの大切さを学びました。
- 統計業務を行うにあたっては、必要なデータの所在を把握しておくことが肝（きも）であること、そして診療情報管理課では出せないデータもあるため、対応可能か判断するためにも把握しておく必要があることを学びました。
- 入院診療費にかかわる DPC 業務では、医事課との W チェックが行われていましたが、患者さんが退院するまでの時間に、連携して入院診療費の計算を終えることが重要であると学びました。万が一、患者さんの会計に間違いがあれば、後日返金や追加対応を行わなければなりません。よってこの業務には緊張感と重い責任が伴うことを改めて知ることができました。
- 公費負担医療制度についてはほとんど知識がなかったので、その確認が大変でした。病院に就職した後も勉強し続けることの重要性を学びました。
- 実習に行く際には自分がやってみたいこと、見たいことを整理しておいて、現場の方から聞かれたときに答えられるようにしておくとういことです。

学生は何を学んだか

- 3年生までの授業のおかげで、カルテの内容は案外理解することができます。ただ、英語で入力されている情報が多いので医学英語は復習しておいた方がよいと感じました。
- 5日間という短い期間でしたが、それだけに実習担当の方は重要なことを次々とお話しくださいます。集中して大事なことをひとつも聞き逃さない姿勢は、社会に出ても大切だと感じました。また、マスクをしている状態での返事や挨拶は、相手の反応がわかるほどハッキリとした声で行う必要があります。
- 笑顔でいることが大切だと感じました。特に、患者さんと接する場面が多いときは、患者さんから見られたり話しかけられる機会がとて多いので笑顔を意識してください。
- わからないことはとにかく質問をすることが大事です。忙しい時や時間がなかったときはメモを取り、翌日などタイミングをみて質問しましょう。
- 2週間は長いようであつという間に終わります。実習でしか学べないことをできるだけ多く学ぶという姿勢で臨めば、大変よい経験につながると思います。

(学生の病院実習報告より)

2025年度 実習をお世話になった病院





公立大学法人

福知山公立大学

The University of Fukuchiyama

地域経営学部 地域経営学科／医療福祉経営学科
情報学部 情報学科

〒620-0886 京都府福知山市字堀 3370
TEL.0773-24-7100 FAX.0773-24-7170
<https://www.fukuchiyama.ac.jp>

